

那 珂 64

—那珂遺跡群 第88・131・134次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一九一集
一一〇一三

福岡市教育委員会

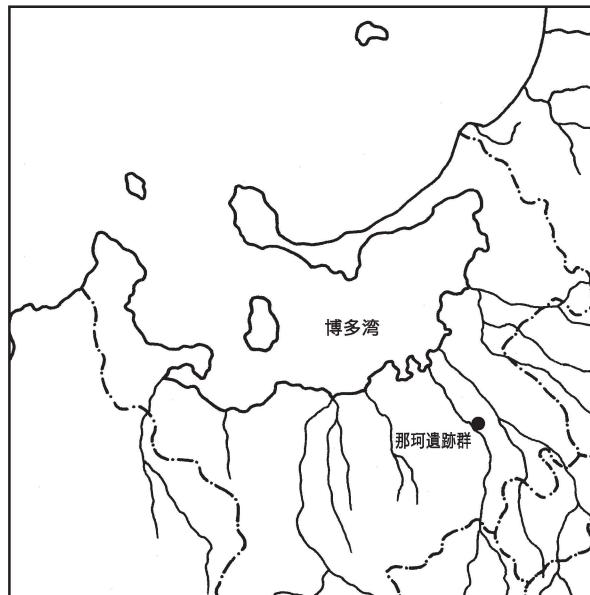
—那珂遺跡群 第88・131・134次調査報告—

2013

福岡市教育委員会

那珂 64

—那珂遺跡群 第88・131・134次調査報告—



遺跡名	遺跡略号	調査番号
那珂遺跡群第88次	NAK- 88	0 3 1 3
那珂遺跡群第131次	NAK-131	1 1 0 5
那珂遺跡群第134次	NAK-134	1 1 2 5

2013

福岡市教育委員会



序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が育まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成15・23年度におこないました、那珂遺跡群第88・131・134次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用負担をはじめとした様々なご協力をいただきました、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 第88次調査	3
1. はじめに	5
2. 調査の記録	6
3. 小結	11
第3章 第131次調査	13
1. はじめに	15
2. 調査の記録	17
3. まとめ	34
第4章 第134次調査	39
1. はじめに	41
2. 調査の記録	42
3. まとめ	56

－例　言－

- ・本書は福岡市教育委員会が、平成15・23年度に実施した那珂遺跡群第88・131・134次調査の報告である。第2章（第88次調査）は大塚紀宜、第3章（第131次調査）は松尾奈緒子・比嘉えりか、第1・4章（第134次調査）は藏富士寛が、それぞれ担当した。
- ・本書の執筆は各調査担当者によるもので、内容など全体の取りまとめは行っていない。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

挿 図 目 次

- 第1図 周辺遺跡 (1/50,000)
- 第2図 那珂第88・131・134次調査 (1/3,000)
- 第3図 調査地点位置図 (1/4,000)
- 第4図 調査区位置図 (1/300)
- 第5図 調査区全体図 (1/100)
- 第6図 SD-01土層断面図 (1/50)
- 第7図 出土遺物実測図1 (1/3)
- 第8図 出土遺物実測図2 (1/3)
- 第9図 第131次調査 周辺の調査地点 (1/2,500)
- 第10図 第131次調査 調査区位置図 (1/1,000)
- 第11図 遺構配置図 (1/80)
- 第12図 SE03平面図・断面図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第13図 SC63平面図・断面図 (1/40)・出土遺物実測図(1/3)
- 第14図 SC92・SC93平面図・断面図 (1/60)
- 第15図 SC92・93出土遺物実測図 (1/3)
- 第16図 SC98実測図(1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第17図 SC88実測図(1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第18図 SC40実測図(1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第19図 SK44実測図(1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第20図 SB128実測図(1/40)・出土遺物実測図 (1/2・1/3)
- 第21図 SD42立面図(1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第22図 SR94平面図・断面図 (1/40)・出土遺物実測図 (1/3)
- 第23図 包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)
- 第24図 そのほかの出土遺物実測図 (1/3)
- 第25図 出土瓦実測図① (1/4)
- 第26図 軒丸瓦瓦当文様復元図 (1/4)
- 第27図 包含層R-1(図25-1・2)・出土状況(1/40)
- 第28図 出土瓦実測図② (1/4)
- 第29図 出土瓦実測図③ (1/4)
- 第30図 調査位置 (1/400)
- 第31図 遺構配置 (1/120)
- 第32図 SC001 (1/60)
- 第33図 SC002 (1/60・1/3)
- 第34図 SC003 (1/60・1/3)
- 第35図 SC004・006 (1/60・1/3)
- 第36図 SC005 (1/60・1/3)
- 第37図 SC007・009・020 (1/60)
- 第38図 SC007・009・020出土遺物 (1/3)
- 第39図 SC008 (1/60・1/3)
- 第40図 SC017 (1/60)
- 第41図 SC018 (1/60・1/3)
- 第42図 SD010・011 (1/80・1/60)
- 第43図 SD013・016 (1/100・1/40・1/20)
- 第44図 SD010・011出土遺物 (1/3・1/1)
- 第45図 SD016出土遺物 (1/3)
- 第46図 SK015出土遺物 (1/3)
- 第47図 SK015 (1/60)
- 第48図 SB021 (1/60)
- 第49図 SP出土遺物 (1/3)

表 目 次

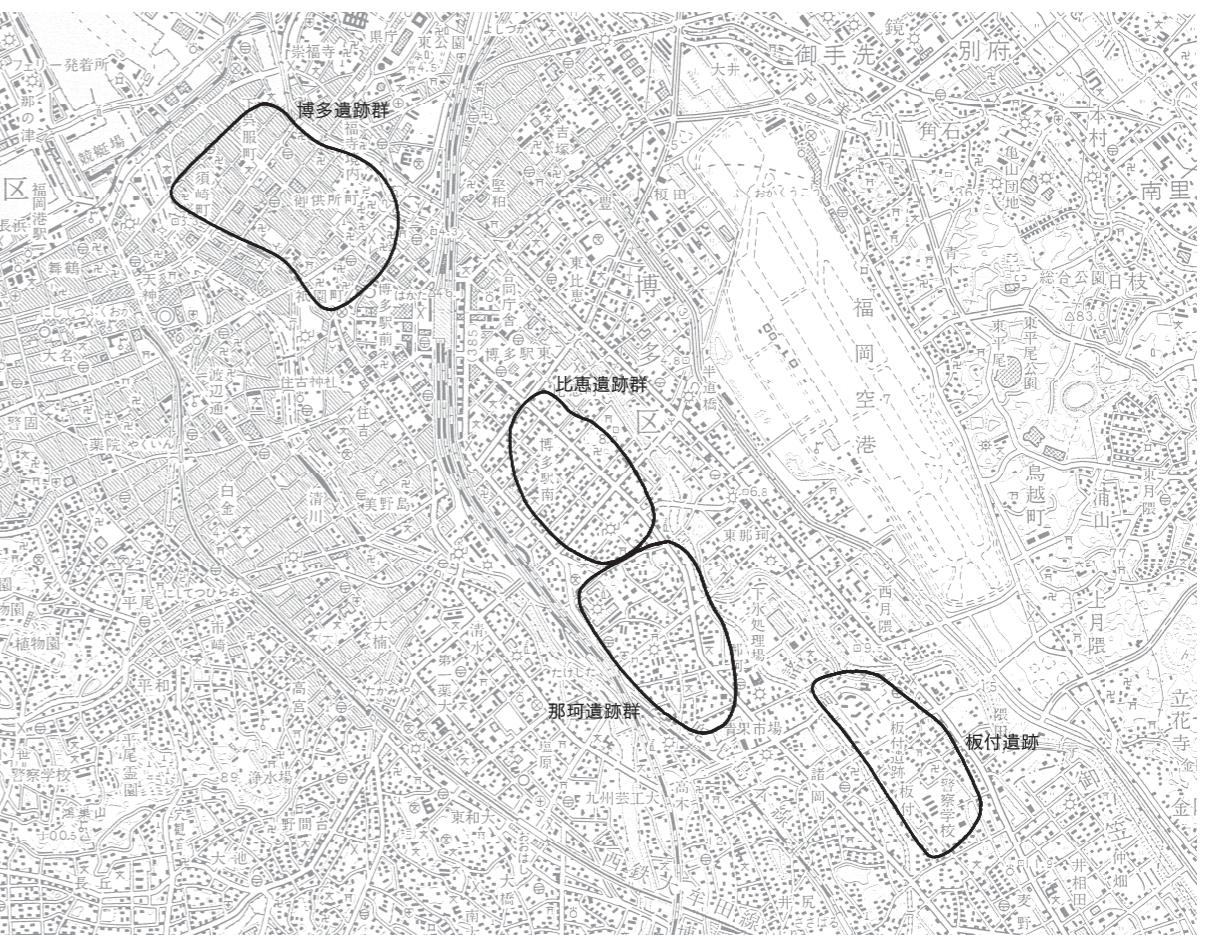
- 表1 那珂遺跡群第131次調査丸・平瓦出土点数
- 表2 那珂遺跡群第131次調査出土瓦観察表

第1章 はじめに

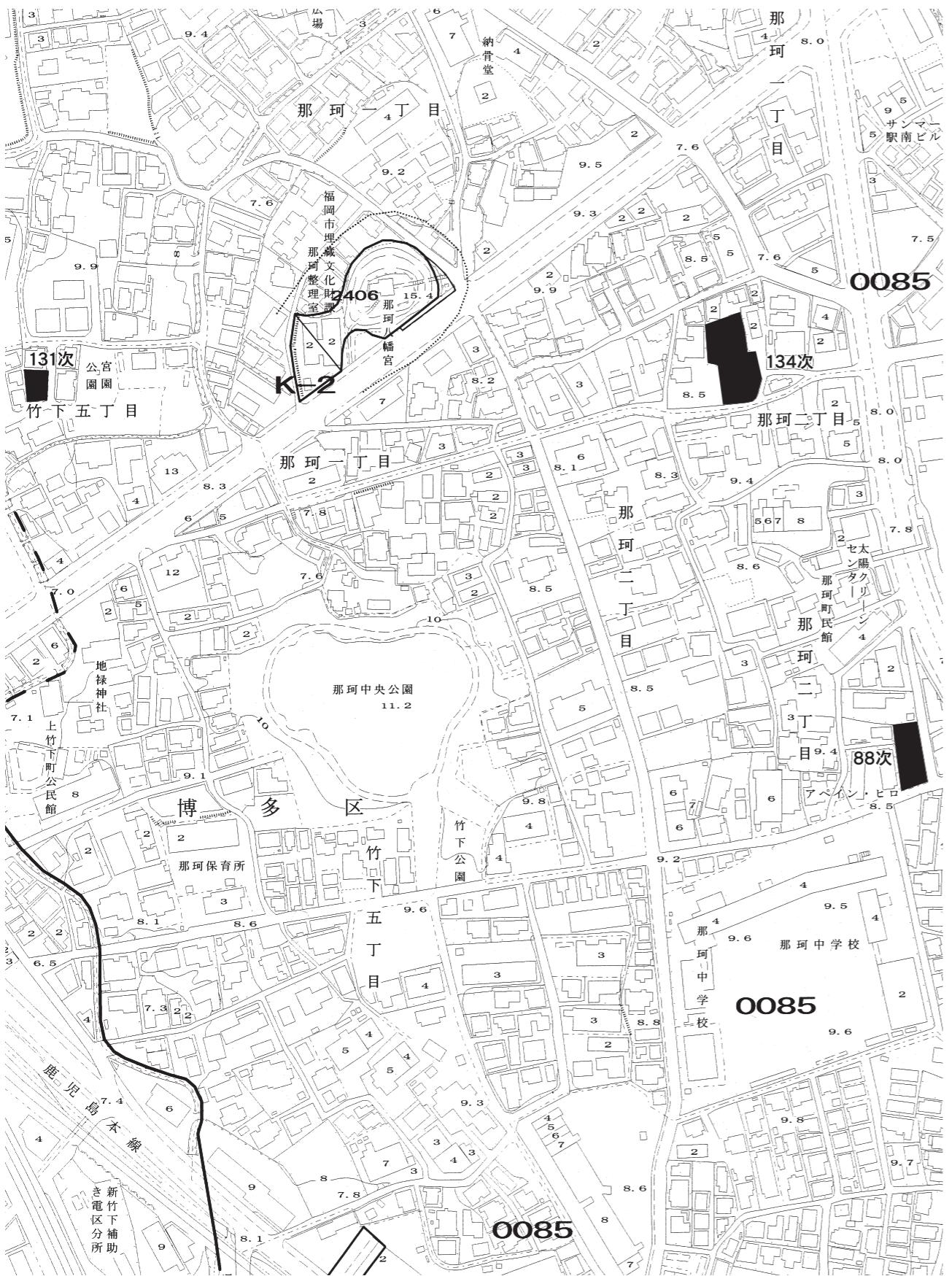
福岡平野は、西は背振山塊から派生した長垂丘陵、東は犬鳴・三群山地によって画された地域の総称である。その内、飯倉丘陵の西側に位置し、室見川流域に広がる早良平野、月隈丘陵によって画され那珂川・御笠川流域に広がる狭義の福岡平野、多々良川・宇美川等によって形成された糟屋平野に細分できる。

那珂遺跡群は狭義の福岡平野中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた標高5~8mの洪積台地上に存在する。那珂遺跡群の北側には、鞍部を挟んで比恵遺跡群が存在し、遺構の分布状況を考えれば、一連の遺跡として認識することも可能である。両者を含めれば、その範囲は南北2.4km、東西1kmの広大なものとなる（第1図）。那珂遺跡群には古く旧石器時代からの遺物も出土しているが、遺跡として本格的な展開を見せるのは弥生時代になってからであり、中期には台地の全体で集落が構成される。以後、古墳時代・奈良時代と遺跡の隆盛は続いている。

本書では、那珂第88・131・134次の計3次の調査成果について報告する。それぞれの調査地点は第2図に示す。第88次調査では、5世紀後半から6世紀代の溝状遺構を検出した。溝内からは、完形に近い須恵器が出土しており、報告では溝内で祭祀を行った可能性を指摘している。第131次調査では、弥生～古代を中心とする多くの遺構を検出したが、中でも包含層から丸瓦瓦当を含む大量の初期瓦が出土したことが注目される。第134次調査では、削平が激しく、遺構の遺存状況は良いものではなかったが、弥生時代～古墳時代の住居を中心とした遺構を確認できた。



第1図 周辺遺跡 (1/50,000)



第2図 那珂第88・131・134次調査 (1/3,000)

第2章 第88次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成15年1月15日、株式会社クリアーデザイン（申請後、株式会社ブラックスコーポレーションに社名変更）より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（当時。以下、埋蔵文化財課と略称）に対して、福岡市博多区那珂2丁目83-2・83-3・83-4における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。（事前審査番号14-2-726）これを受けて埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、平成15年2月4日に試掘調査を行い、その結果当時の地表下40cmで遺構を確認した。この試掘結果を受けて申請者と埋蔵文化財課で協議を行い、建物については基礎高を上げて遺構面に影響がないよう計画し、掘り車庫部分については発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は国庫補助金の適用を受け、平成15年5月12日から同年5月27まで実施した。なお、文化財部は組織改編のため平成24年4月1日付で経済観光文化局へ移管し、整理作業は新組織下で行った。

(2) 調査組織

組織名称・所属はいずれも調査当時のものである。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男

調査第2係長 田中壽夫

調査庶務：文化財整備課 管理係 御手洗清

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係 米倉秀紀 田上勇一郎

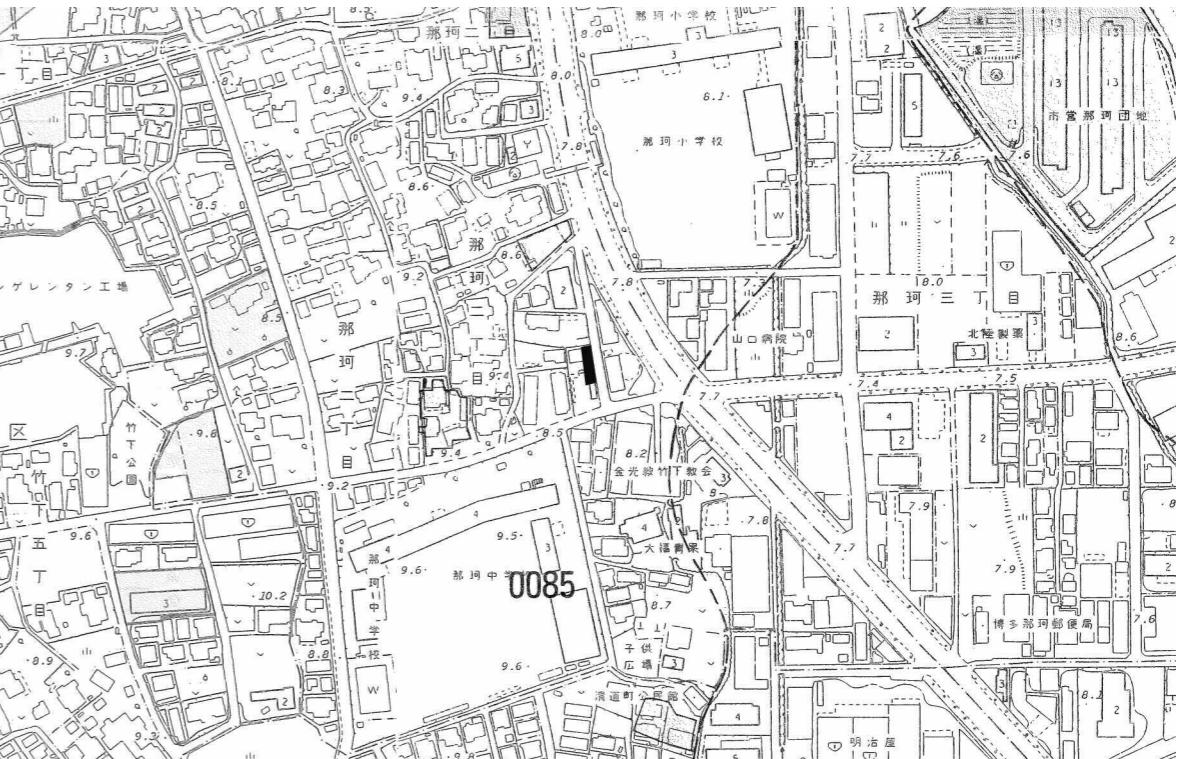
調査担当：埋蔵文化財課 調査第2係 大塚紀宜

整理主体：福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

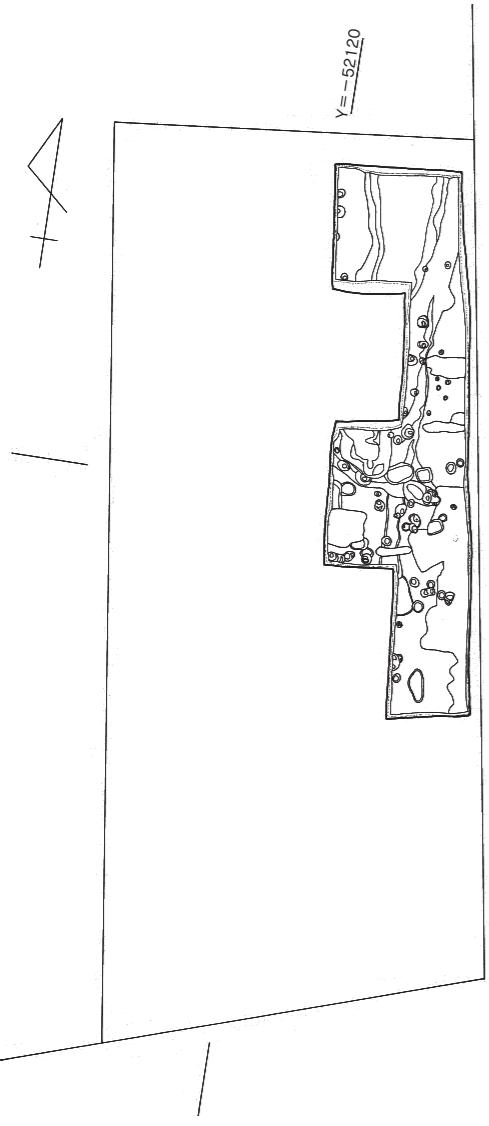
一例 言

- 本章は福岡市教育委員会が、平成15年度に実施した那珂遺跡群第88次調査の報告である。調査は大塚紀宜が担当した。
- 本章における方位は座標北（日本測地系で測量した成果を世界測地系に変換して掲載）であり、遺構についてはSB（掘立柱建物）、SD（溝）、SP（柱穴）といった略号を使用している。
- 本章の執筆、編集は大塚がおこなった。
- 本章に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。

遺跡調査番号	0313		遺跡略号	NAK88	
所在地	福岡市博多区那珂2丁目83-2・83-3・83-4	分布地図番号	板付24		
開発面積	488.02m ²	調査対象面積	86.7m ²	調査面積	86.7m ²
調査期間	平成15年5月12日～平成15年5月27日	事前審査番号	14-2-726		



第3図 調査地点位置図 (1/4,000)



第4図 調査区位置図 (1/300)

2. 調査の記録

(1) 調査概要 (第3・4図)

那珂遺跡群第88次調査地点は、那珂遺跡が立地する那珂川右岸の台地の南東側縁辺部に位置する。調査区周辺は宅地化が進んで自然地形はほとんど失われており、調査地点の東側を走る筑紫通りとの比高差がかろうじて台地の端であることを示すだけである。

敷地は東側と南側で道路に面しており、南側道路は現在の敷地高とほぼ同じ高さで、東側道路は敷地高から80cm低い。このことから、台地自体がこの敷地の東側で急激に落ちていることがうかがえる。この段落ちが本来の台地縁辺を示すものなのか、後世の造成によるものかは確定できない。

調査は共同住宅建設に伴う工事範囲のうち、車庫として掘り下げる部分を対象とした。また、敷地南側では試掘の結果、大きく削平を受けており、遺構が遺存しないと判断されたため、調査範囲から外している。また、調査区南東側を中心とした範囲は以前の宅地造成の際に大きく搅乱され、遺構が破壊されていることが調査時に確認できた。

調査は重機による表土除去後、人力による遺構検出・遺構掘削を進めた。表土を地表下40cmまで除去したところローム層に達したため、このローム層上面で遺構の検出作業を実施

した。表土は茶褐色粘質土で砂を多く含み、下層から混入したとみられる土器小片が含まれる。検出された遺構は大規模な溝状遺構と柱穴・土坑で、溝状遺構はトレンチ調査を行い規模を確認した後で人力で掘削し、柱穴・土坑も順次掘削を進めた。写真・図面等の記録を作成後、重機で現状に復して調査を完了した。調査実施面積は86.7m²、遺物総量はコンテナケース9箱相当である。

(2) 主要な遺構・遺物

SD-01

遺構 調査区北側から中央部にかけて南北方向に延び、屈曲して西側に延びるとみられる大規模な溝状遺構である。遺構が良好に検出できたのは調査区北側部分で、この部分では溝の幅2.4~3.2m、遺構面から溝底までの深さ1.1mの規模が確認できた。溝の断面形は幅広のU字形で、東側斜面の傾斜は緩く、西側斜面は急で一部直立またはオーバーハングしている部分もある。床面の傾斜はほぼ平坦で、床面を水が流れたような形跡はみられない。

調査区中央部では他の土坑や柱穴と重複しており、溝の西半分が調査区外に及ぶため、溝の形状

を把握することが困難である。しかし溝の壁面が東西方向に直立し、南側に溝が及ばないこと、および調査区西側に設定された試掘トレンチで大型遺構の存在を確認していたことから、この部分で溝が西側に屈曲する可能性が大きい。

溝内部の覆土（第3図）は、下層から黒褐色粘土、暗黄褐色粘土、黒褐色粘土、暗褐色粘土の順で堆積している。下層の黒褐色粘土は地山のロームを多く含み、周囲からの土砂の流れ込みによって徐々に溝が埋没していったことが伺える。

溝内部には、特に東側斜面部分を中心として柱穴が確認できる。柱穴のなかには掘り方が溝斜面付近で漏斗状に開くものが確認でき、これらの柱穴は溝が存続している時期に溝斜面から掘り込まれたものと推定される。また断面が筒状で溝斜面部分で開かない形状の柱穴は溝の掘削前あるいは埋没後に掘られた、溝とは無関係な時期のものと考えられる。溝にともなう柱穴の性格として、柵列や橋などの構造物が想定できるが、限られた調査範囲の中では柱穴群の全体像が見えず、柱穴の構成を有機的に考えることは困難である。

遺物 (第7・8図) 今回の調査で出土した遺物のうち、図示可能な遺物は全てSD-01内から出土したものである。1~20は土師器、21~38は須恵器である。

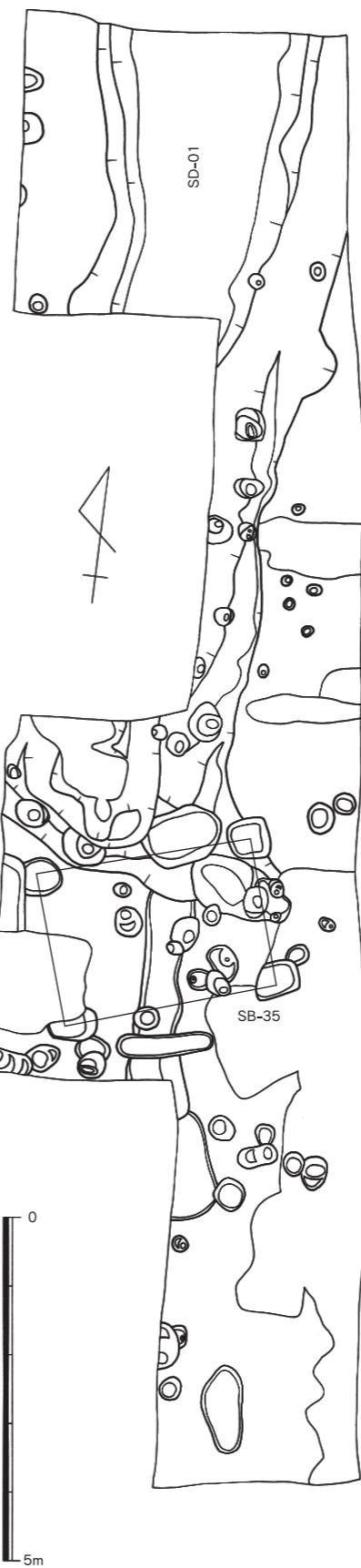
1~5は甕形土器。1・2は弥生土器で、弥生中期後半～中期末の様相を示す。溝掘削以前に周囲に存在した遺構からの流入とみられる。3は頸部から屈曲して外湾気味に立ち上がり、端部はヨコナデで面取りする。胴部外面は粗いハケ目、胴部内面は横方向ケズリ。古墳中期前半のものとみられる。4は頸部が締まらず、口縁部は外側に短く開く。5は甕形土器の胴部とみられるが、外面は格子目タタキ後横方向に沈線を施す。内面はハケ目後ナデ。胎土は赤褐色軟質で、土師質である。

6~8は小型甕。6は胴部が張らず、口縁部は緩く外反する。7は上半部のみの破片で、口縁部は短く外反し、胴部はやや丸みをもつとみられる。8は丸底の胴部で頸部が緩く締まり、口縁部は厚めで短く外反する。古墳時代中期後半～後期前半とみられる。

9は鉢状の手捏ね土器。内外面とも指圧痕で凹凸がある。

10は古墳時代初頭の壺形土器。口縁部は外反し端部は丸める。頸部内面に連続する指頭圧痕が残る。

11~16は壺。11は球胴に近く、口縁部は短く外反する。12も口縁部は短く外反し、胴部外面にケズリ状の痕跡が残る。13は口縁部が直立し、外面にケズリ状の痕跡が残る。



第5図 調査区全体図 (1/100)

14は口縁部がわずかに内湾し、15・16は口縁部が直立する。14～16とも内外面とも摩耗が著しく、調整は部分的にしか遺存していない。古墳時代中期から後期のものとみられる。

17は高壺。壺部下部は屈曲部がなく丸みを持ち、口縁部は短く外反する。脚部は短く外側に大きく開き、内部は中実である。内面にミガキ痕がわずかに残る。

18・19は甌。いずれも把手がなく単孔である。18は上部が開く筒状の胴部で、外面はハケ目、内面はケズリ。19は丸い胴部で外面はハケ目、内面はケズリ。20は器台とみられる。全体に円筒形で、手捏ね整形、中実で非常に重い。

21～26は須恵器壺身。21は立上がりが高く、内傾して端部は面取りする。壺部は丸く、底部付近はヘラ削り。22は立上がりが高く、端部は丸く仕上げる。壺部は丸く、外面1/2以上ヘラ削り。23は立上がりが低く、壺部は低くなるとみられる。24も立上がりが短く内径し、壺部は低く、外面1/2弱がヘラ削り。25はやや小型化し、立上がりは短く、壺部は低く、底部付近ヘラ削り。26は小片で高台をもち、時期的に後出するもので後世の混入とみられる。

27～30は壺蓋または高壺蓋。27～29はいずれも頂部を欠き、摘みの有無は不明。天井部と体部の境界に明瞭な段をもち、体部は直立し、端部は面取りを施す。天井部は回転ヘラ削り、体部は回転横ナデ。27・28は天井部が深く、29は天井部がやや扁平気味になる。30は完形に復元でき、摘みをもち、深い天井部と直立する体部の境界に明瞭な段をもつ。天井部は回転ヘラ削り、体部と内面は回転横ナデ。

31～35は高壺。31・32は脚部に横カキ目後、長方形透しを開ける。31は壺部に蓋受けをもち、立上がりは高く、端部は面取りする。壺部底部外面はヘラ削りで、壺部と脚部を接合して成形する。33は壺部に蓋受けがなく、体部と底部の境界に浅い段がつく。脚部の遺存部分に透かしは認められない。34・35は脚部のみの破片で、いずれも外面は回転横ナデ。34は方形、35は円形の透かしが開けられる。

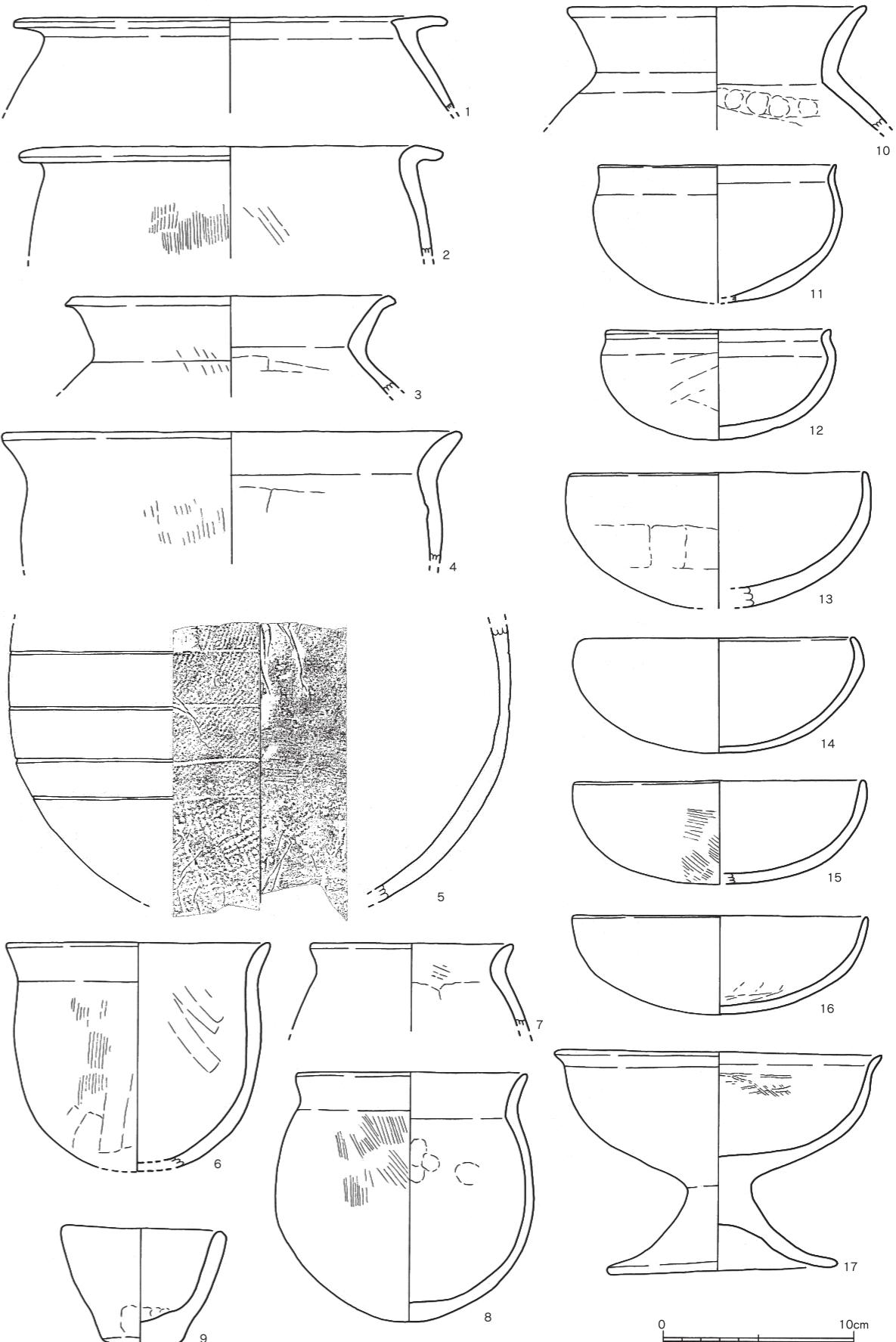
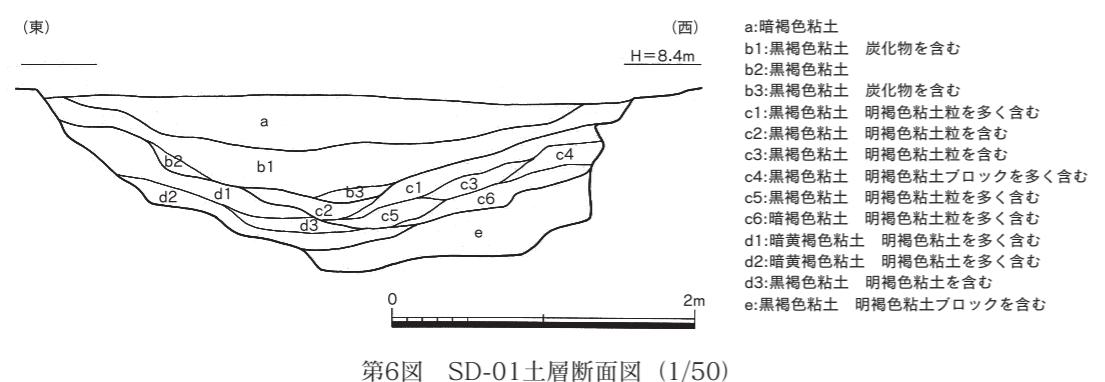
36・37は甌。口縁部は内湾気味に大きく開き、端部は平坦に面取りされる。頸部に明瞭な段がつく。体部はやや扁平な球形で、中央部に円形の孔を開ける。頸部と胴部の外面に細かい波状文がつく。

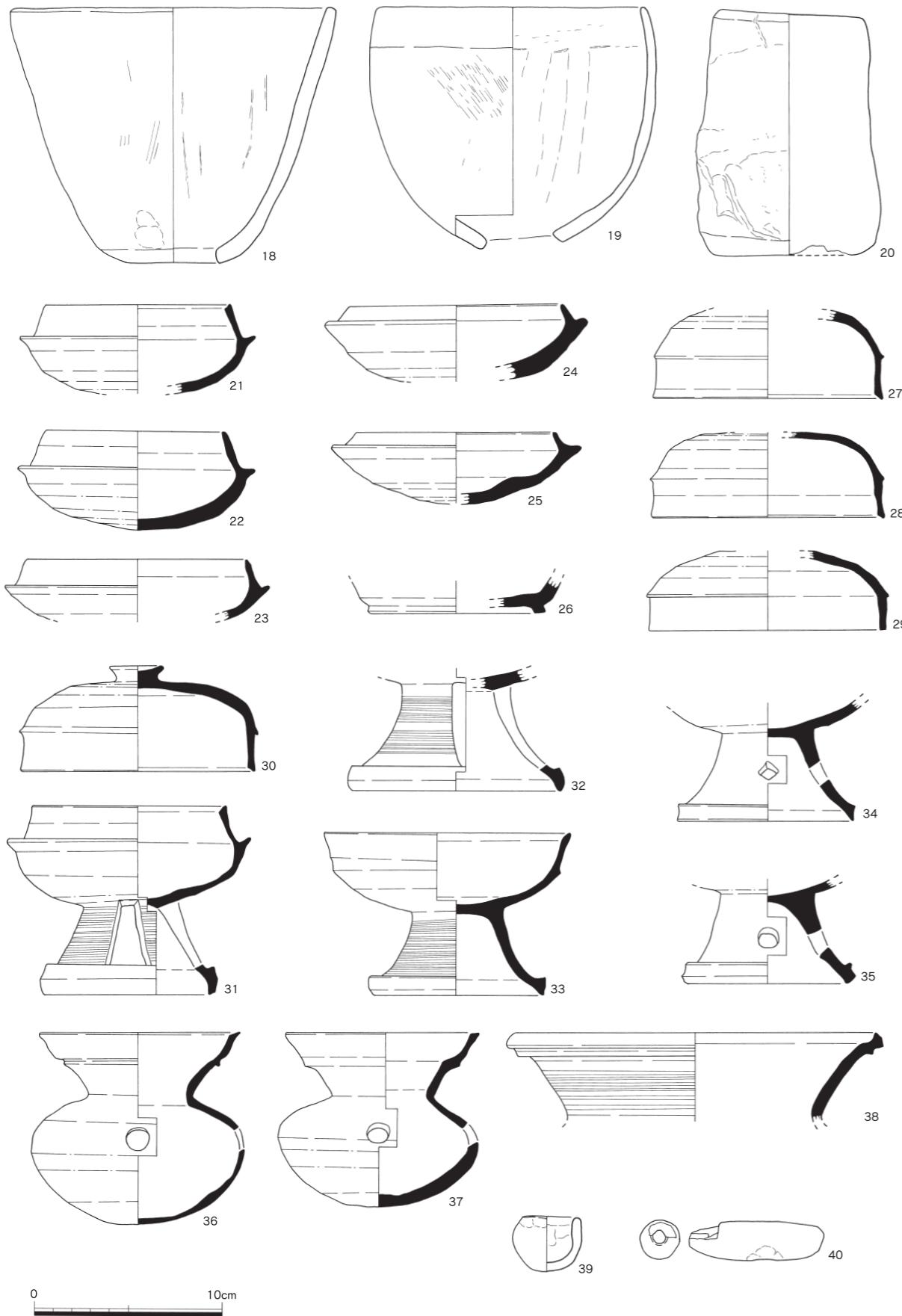
38は甌の頸部～口縁部破片。口縁端部は上方に跳ね上がり、口縁直下に段がつく。

39はミニチュア土器。40は土錐。

SB-35

調査区中央付近で確認された掘立柱建物で、調査区内で1間×1間の範囲を確認できた。調査区の西側に連続する可能性が高い。SD-01と重複しており、切り合い関係からSD-01に先行するも





第8図 出土遺物実測図2 (1/3)

のである。柱穴掘り方は隅丸方形で、各柱穴の床面レベルはほぼ一致している。南北梁行2.1m、東西桁行3.1mをはかる。

遺物 各柱穴から出土した土器破片はごく少量で、小片で図示不可能である。弥生土器の破片とみられる。

3. 小結 一溝SD-01の検討を中心に—

今回の調査は範囲が狭く、SD-01についても調査範囲内ではその一部しか検出できていない。現段階でこのSD-01の規模や性格について検討するのはいささかおぼつかないが、今回得られた結果よりこの問題に触れたい。

SD-01は調査区内でほぼ南北方向に直線的に延び、削平を受ける以前はさらに広い幅だったことが想定できる。南東隅は鋭角になっているが、これは他の遺構による影響も考慮する必要があり、西への屈曲角度は直角に近い角度を含めて考える必要があろう。また、この部分で溝が終わり、南側が陸橋状になっている可能性もある。

溝の時期については、一部の弥生土器を除けば出土遺物が5世紀後半以後の須恵器・土師器を主体としていることから、5世紀後半に掘削され、6世紀にかけて埋没していったとみられる。5世紀後半の須恵器のうちに完形に近い高環・縁があることから、5世紀後半に溝内で祭祀を行ったことも考えられる。

那珂遺跡群については南北方向の区画が存在することが久住猛雄氏によって想定されているが、SD-01の掘削方向はこの区画の規制が台地東側縁辺まで及んでいる可能性があることを示唆している。

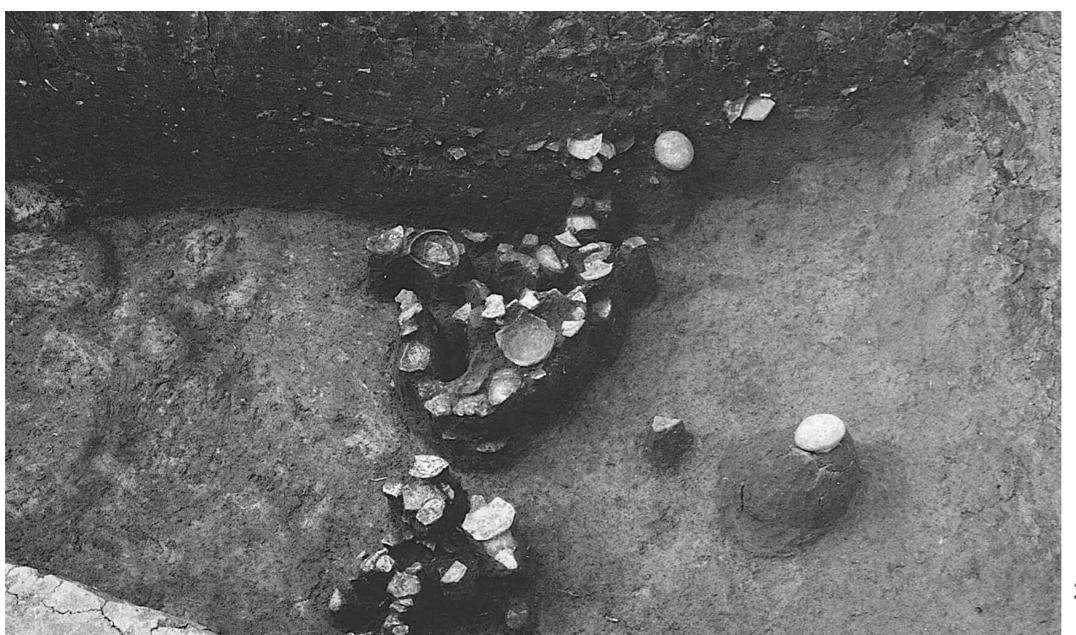
しかし、今回の調査地点は那珂遺跡群全体の東端にあたり、大規模な溝を掘削する必要がある施設（例えば居館など）を想定することは現状では無理があるとおもわれる。今回の調査区周辺の調査がある程度進んだ段階で、遺跡範囲全体のなかでのこの地区の位置付けを改めて行うことが適當であろう。



1 調査区全景(南から)



2 SD-01(南東から)



3 SD-01内土器出土状況
(南から)

第3章 第131次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

福岡市教育委員会文化財部は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成23年2月4日、個人専用住宅建設に先立ち、福岡市博多区竹下5丁目20番2号地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1に照会文書が提出された（事前審査番号22-2-1029）。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、当該申請地が、周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群の範囲内に位置しており（分布地図番号37・38-0085・遺跡略号NAK）、土木工事が文化財に影響を与える可能性が大きいことから、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。平成23年4月5日に試掘調査を行い、地表下50cmの鳥栖ローム層上面で弥生時代および古墳時代の遺構が存在することを確認した。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、この旨を申請者に回答し、その取り扱いについて協議を行い、その結果、申請地面積225.76m²のうち、個人専用住宅建設にともなう基礎工事によって遺構の破壊が免れない125.45m²について、平成23年度に発掘調査、平成24年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成23年5月9日から同年6月8日まで実施した（調査番号1105）。調査面積は88m²および、検出された弥生時代・古墳時代・中世の遺構から、弥生土器・土師器・須恵器・石器・輸入陶磁器などを中心にコンテナ20箱分の遺物が出土した。

(2) 調査の組織

調査を実施した平成23年度および整理報告を行った平成24年度の組織は以下の通りである。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：(平成23年度) 福岡市教育委員会 埋蔵文化財第2課 課長 田中 壽夫

調査第1係長 米倉 秀紀

(平成24年度) 福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 宮井 善朗

調査第1係長 常松 幹雄

調査庶務：(平成23年度) 埋蔵文化財第1課 管理係 井上 幸江

(平成24年度) 埋蔵文化財審査課 管理係 川村 啓子

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下 博文（現 福岡市埋蔵文化財センター）

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 松尾 奈緒子（現 埋蔵文化財審査課事前審査係）

調査作業：石川 洋子 岩本三重子 上野 照明 大庭 智子 小野 千佳

唐島 栄子 桑野 孝子 草場 恵子 豊丸 秀仁 中村 圭子

整理作業：松下伊都子 宮崎由美子 渡辺 宏代 （五十音順・敬称略）

なお、文化財部は、組織改編のため、平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

(3) 第131次調査地点の位置と周辺の調査

本章で報告する131次調査地点は、那珂遺跡群の北部西側に位置している。本調査区の周辺で行われた115次調査では、7世紀代の大型掘立柱建物等が確認され、初期瓦が出土している。115次調査や試掘調査62-2-90等から、本調査区北側は周囲より一段高い平坦地となっており、7世紀代

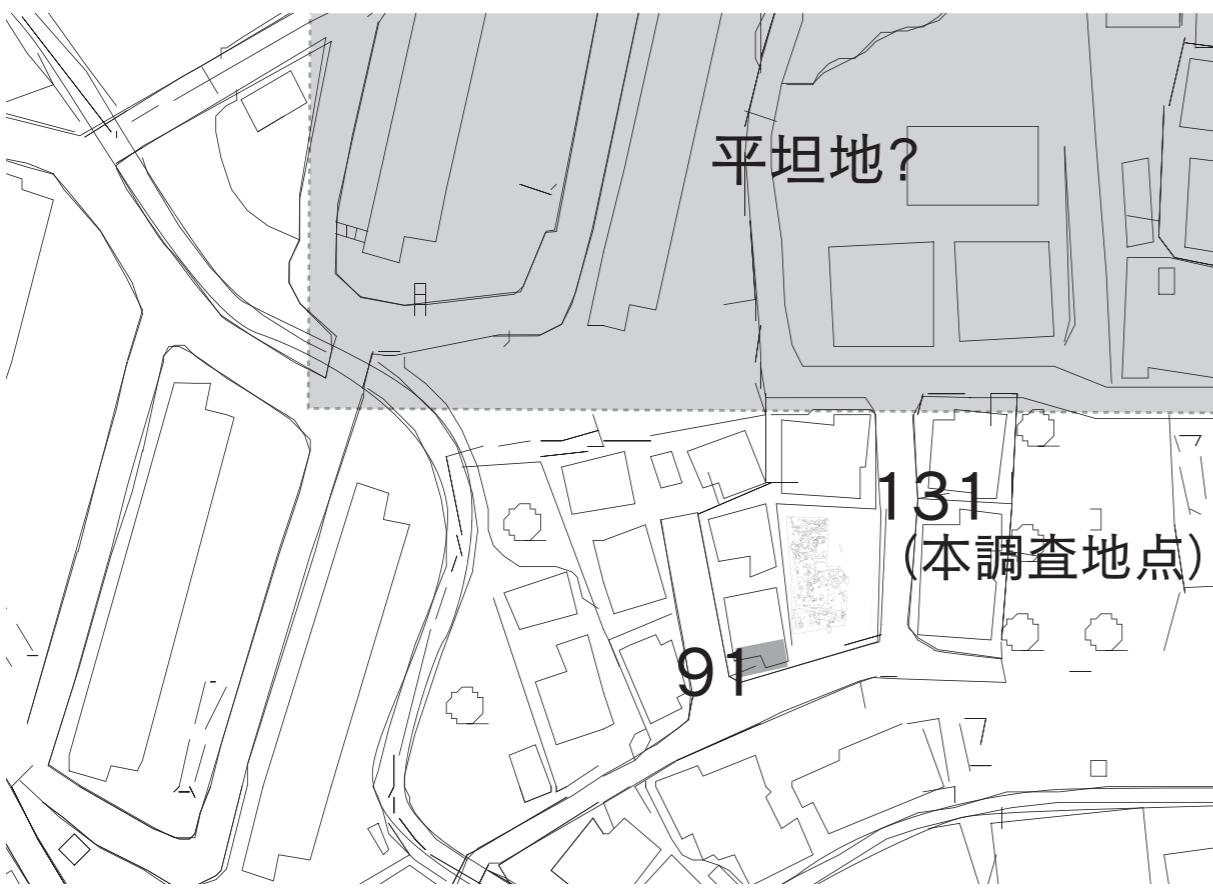
一例 言一

1. 本章に使用した遺構実測図の作成は松尾奈緒子、福薗美由紀が行い、写真は松尾が撮影した。
2. 本章に使用した遺物の実測・製図は大庭友子・濱石正子・松尾が行った。
ただし、第25・26・28・29図の遺物の実測・トレースは比嘉えりかが行った。
3. 方位はすべて磁北であり、真北より6°40'西偏している。座標は、日本測地系（第II系）を用いている。
4. 遺構は、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、性格不明遺構をSXと略号化して記述した。

遺跡調査番号	1105		遺跡略号	NAK131	
所在地	福岡市博多区竹下5丁目20番地2		分布地図番号	東光寺37・塩原38	
開発面積	225.76m ²	調査対象面積	125.45m ²	調査面積	88m ²
調査期間	平成23年5月9日～平成23年6月8日		事前審査番号	22-2-1029	



第9図 第131次調査 周辺の調査地点 (S=1/2,500)



第10図 第131次調査 調査区位置図 (S=1/1,000)

の瓦葺き建物が展開していた可能性が指摘されている（福岡市教育委員会編2008『那珂50－那珂遺跡群第115次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集）。しかし、本調査区は115次調査と比較して遺構面の標高が約0.8m低く、また、調査区の西隣で行われた91次調査では、削平が著しく遺構の残りが悪い状況が確認されていた。このことから、調査前は、遺構の遺存状況は良くないと予測されていた。

2. 調査の記録

本調査地点の現況は宅地で、現地表面の標高は9.2m前後である。試掘調査の結果を踏まえて、鳥栖ローム上面を遺構面と設定し、2011年5月9日から、重機による表土剥ぎを開始した。排土を場内で処理する必要があったため、調査対象範囲の南側をI区、北側をII区として、調査を行った。

鳥栖ローム遺構面の標高は8.65m～9.0mをはかり、北から南へ傾斜している。その上層には、砂礫を多く含む褐色包含層が層厚10cm～30cm程度堆積していた。当初、この包含層を重機によって掘削していたが、初期瓦をはじめとする弥生土器・土師器・須恵器等の遺物が多く含まれていたため、包含層上面で機械掘削をとめて、人力に切り替えて遺構検出を行った。しかし、数度にわたる遺構検出にもかかわらず、遺構と認められるものは見いだせず、調査の工程を考慮して、包含層を人力で除去し遺物の回収を行うこととした。その後、I区南壁土層を検討した結果、13世紀前半の龍泉窯青磁碗および土師器壊・小皿を副葬した中世墓SR094が、この褐色包含層上面から掘削されていることが判明した。このことから、褐色包含層は13世紀までに形成されたものであり、包含層上面には、13世紀代以降の遺構が存在した可能性が高い。しかし、褐色包含層に含まれる中世の遺物はごく少量であることから、中世以降の遺構は少量であったとおもわれる。

鳥栖ローム遺構面では、弥生時代後期の井戸1基、古墳時代前期の竪穴住居4基、古墳時代後期の竪穴住居1基、古代とおもわれる掘立柱建物1棟、中世の溝1条、土壙墓1基などのほかに、弥生時代～中世まで幅広い時期の柱穴や土坑などを多数検出した。柱穴・土坑の多くは検出面から0.5m～1.0m程度、竪穴住居も0.2m～0.5m程度の深さをもって遺存しており、遺構の残りは非常に良好であったと評価できる。これらの遺構を1ヶ月かけて調査し、2011年6月8日に調査を完了した。

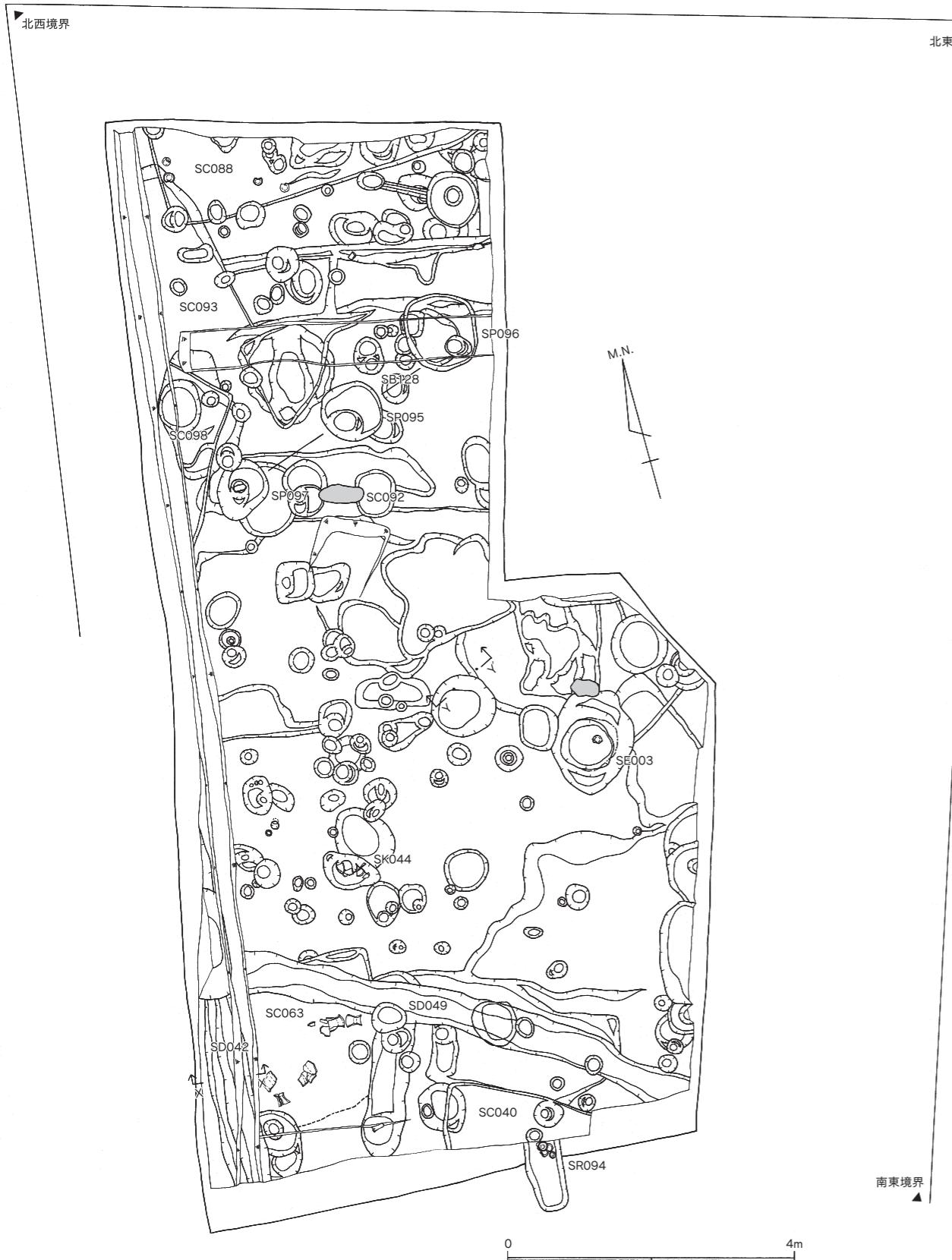
(1) 弥生時代の遺構と遺物

SE03 (第12図・図版2-4)

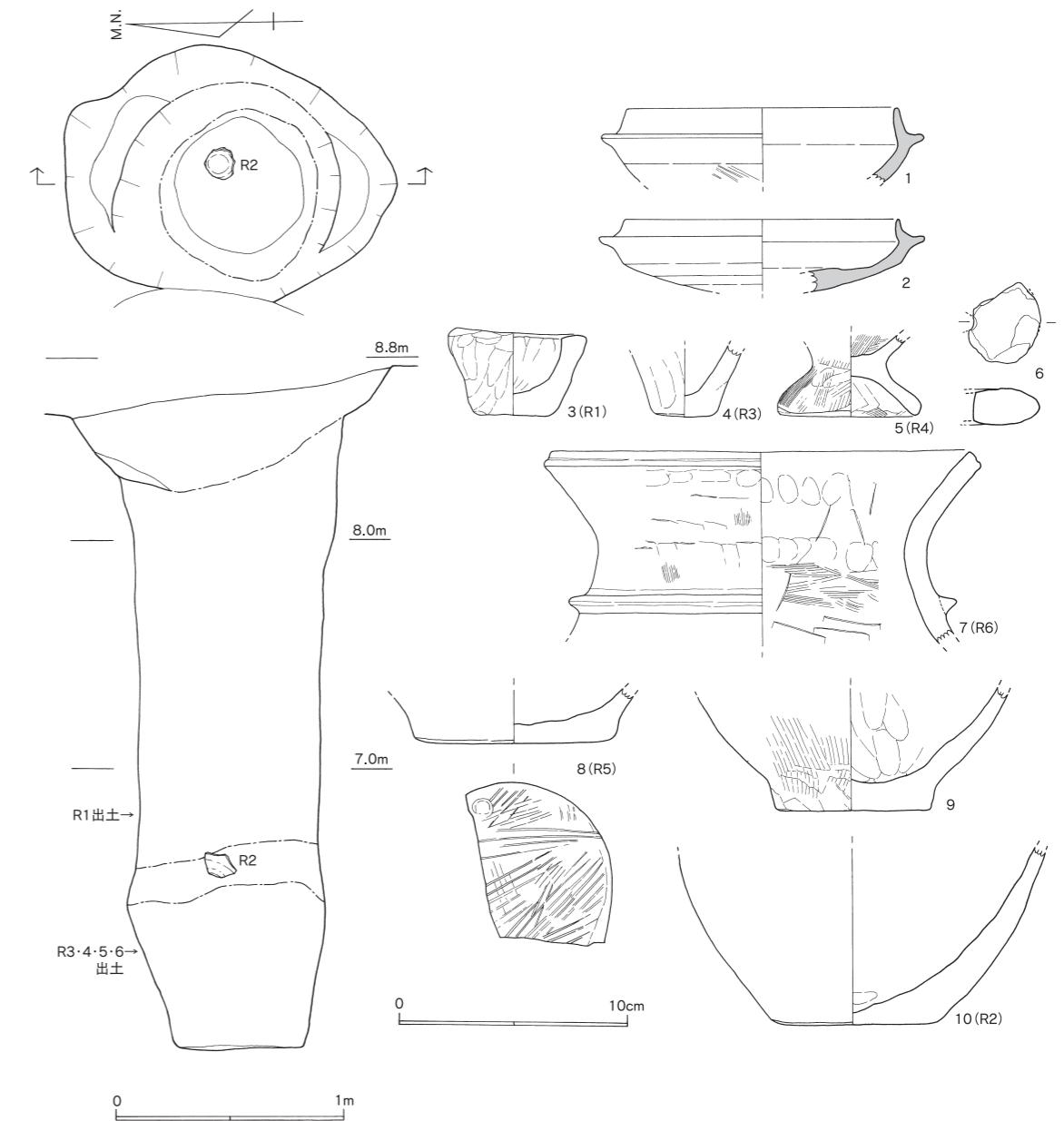
I区北東部で検出した、平面不整円形の井戸である。直径は約1.2m～1.35m、検出面から深さ約3mで底となる。検出面の標高は8.75m、底面の標高は5.8mをはかる。検出面から2.1m前後のところから下の壁面は崩落していた。

覆土は、鳥栖ロームブロックを含む暗褐色粘質土を主体とする。検出面から0.75m前後のところで、しまりのない黒色土が厚さ10cm程度堆積し、これを除去すると地山に類似する鳥栖ロームブロックとなるため、当初はこれを底面と誤認していた。ところが、層厚30cm程度をはかるこの地山ブロックを掘り下げるとき、再び鳥栖ロームブロック・八女粘土ブロックを含む暗褐色土となり、底面となる。このことから、SE03は廃絶時に、検出面から0.75mの深さまで一度にしかも丁寧に埋め戻されたと考えられる。遺物は、検出面から1.9mのところでR1が（図4-3）、2.2mのところでR2が（図4-10）、2.6mのところでR3・R4・R5・R6が出土した（図4-4・5・7・8）。

出土遺物から、弥生時代後期前半の井戸であると考えられる。



第11図 遺構配置図 (S=1/80)



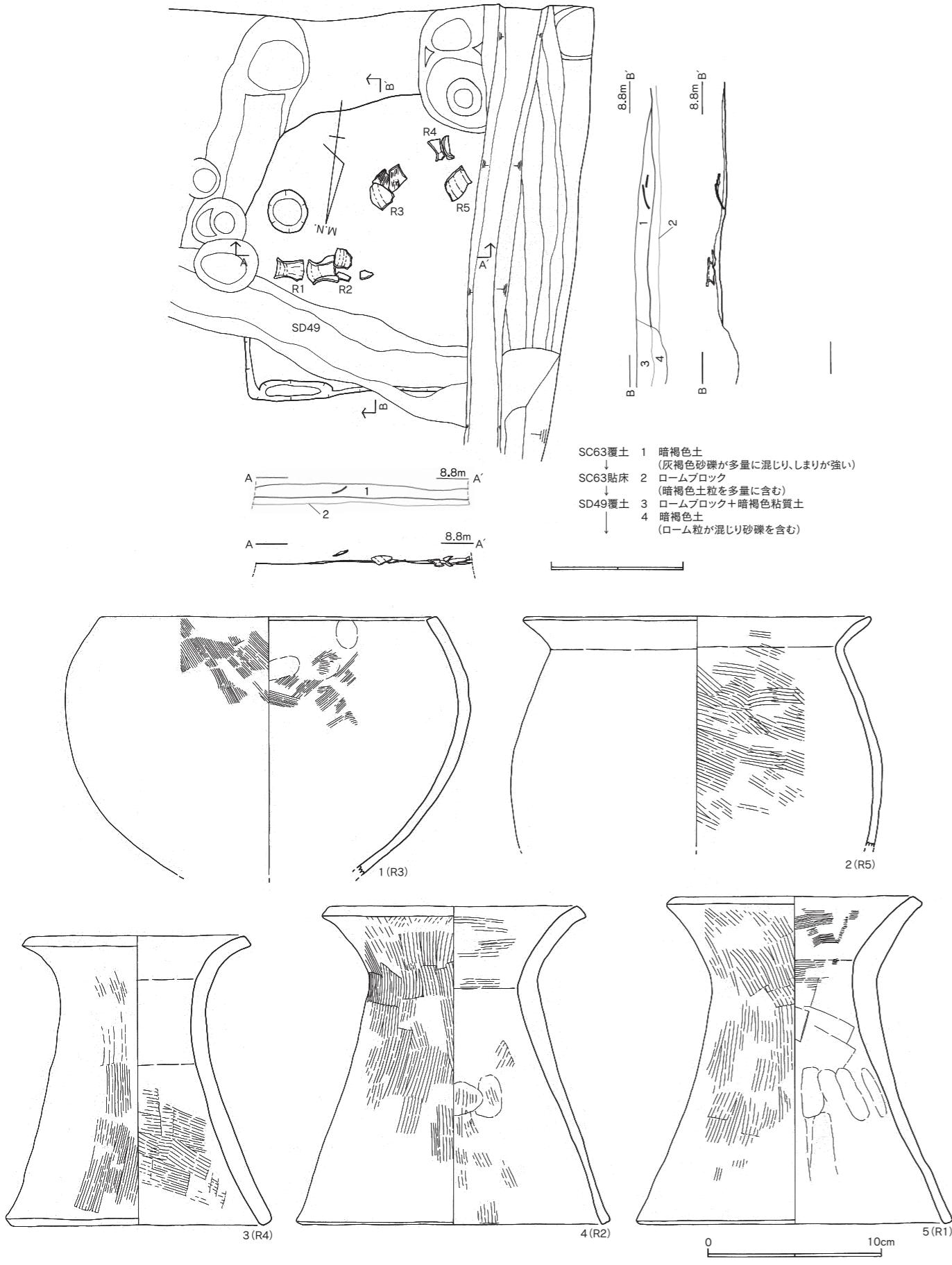
第12図 SE03平面図・断面図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第12図)

1・2は検出面から出土した須恵器坏である。1の底部外面にはタタキのような痕跡がのこる。3 (R1)・4 (R3)・5 (R4) はミニチュアで、3・4は手捏ねの鉢、5は台付鉢か。3・4・5の胎土にはともに石英粒が含まれており、3・4はにぶい橙色、5は橙色を呈する。6は中心に焼成前に穿孔された小孔をもつ円形の土製品である。土製紡錘車か。重量は31.04gをはかる。7 (R6) は弥生土器甕壺である。外面には縦方向の工具ナデの痕跡が、内面には指押さえと横方向の工具ナデの小口痕がのこる。8 (R5) は弥生土器底部で、底面は粗くハケ調整されている。9は弥生土器甕、10は弥生土器壺である。9・10ともに底部から胴部下半にかけて黒斑をもつ。

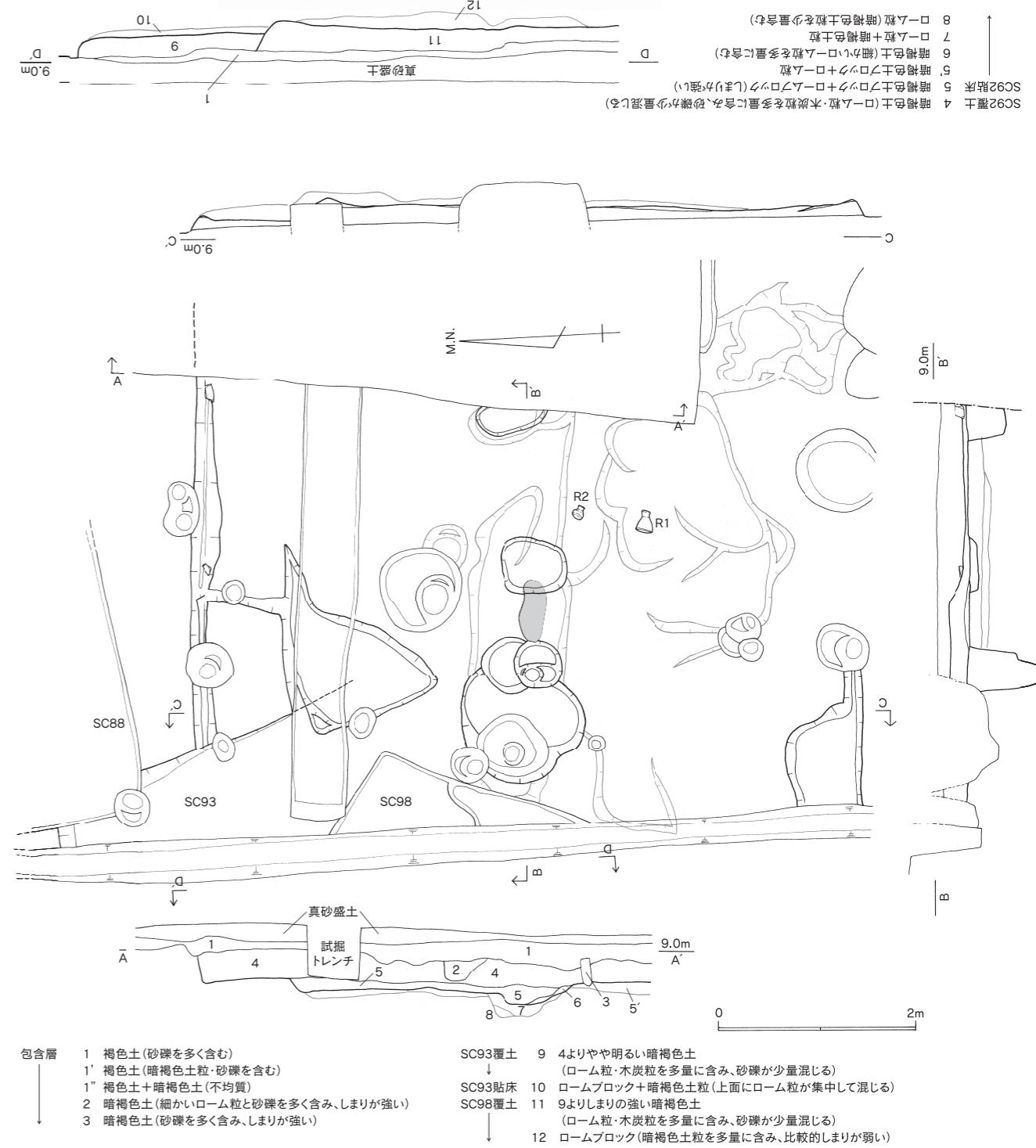
SC63 (第13図・図版2-3・6)

I区南西部に位置する堅穴住居である。北東隅をSD049に、西側を攪乱とSD042にきられ、南



側は包含層掘削途中で検出することができなかつたため、遺存状況は悪い。平面形は主軸を南北方向にとる方形をなすとおもわれ、南北辺2.2m以上、短軸1.7m以上をはかる。検出面の標高は8.75mである。覆土は、砂礫を多量に含みしまりの強い暗褐色土を主体とする。

床面は暗褐色土粒を多量に含むロームブロックで整地され、その貼床上面でR1～R5（第13図-1～5）が出土している。検出面から貼床上面までの深さは約0.2mをはかる。主柱穴や炉を検出することはできなかつた。



出土遺物から弥生時代後期前半の堅穴住居であると考えられる。

出土遺物（第13図）

1はR3、2はR5、3はR4、4はR2、5はR1である。1は鉢で、全体的に摩滅しているが、口縁部付近にわずかに指オサエとハケ調整がのこる。2は土師器甕。内外面はハケ調整で仕上げられ、胴部中位外面に黒斑がみられる。3～5は器台である。3・4・5ともに胎土には石英粒を含み、黄橙色を呈する。

SC92（第14図・図版1-2・3-3）

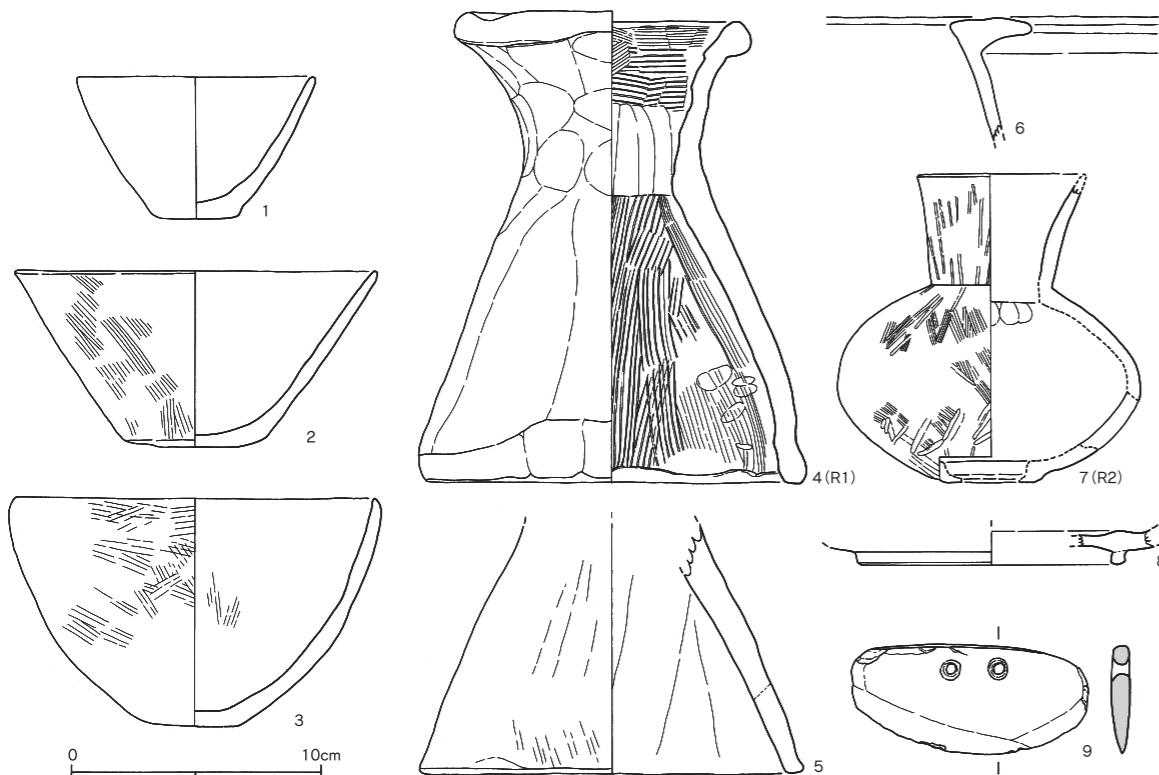
II区中央部に位置する方形の堅穴住居である。南北辺6.8m、東西辺3.8m以上を検出したが、住居の東側と西側は調査区外へと続くため、長軸方向を含めて住居の構造は不明である。検出面の標高は9.0mをはかる。覆土は、ローム粒・木炭粒・砂礫を含むしまりの強い暗褐色土を主体とする。

北西側に、地山を削りだして成形された幅約0.9mのベッド状遺構を設けている。検出面からベッド状遺構までの深さは0.3m、床面までの深さは0.42mをはかり、ベッド状遺構と床面の比高差は約0.1mである。床面は暗褐色土とロームの混合土によって整地されており、中央部の床面付近で焦土溜りを検出した。壁溝は、北辺で検出され、幅約0.2m、検出面からの深さ0.1mをはかり、断面形はV字形またはU字形をなす。

出土遺物から弥生時代後期後半～終末期の堅穴住居と考えられる。

出土遺物（第15図）

1～3は鉢である。1は摩滅が著しく調整は観察できないが、2・3とともにハケ調整で仕上げられている。1～3ともに胎土には大粒の石英が含まれ、淡黄橙色～橙色を呈する。4は第14図に示したR1で、床面から浮いた状態で出土した器台である。外面には指オサエと工具ナデ、内面には



第15図 SC92・93出土遺物実測図 (S=1/3)

指オサエと縦ハケがのこる。5は検出面から出土した器台である。1～3と同様の胎土をもち、色調もやや赤味が強いものの類似する。6は須玖式の甕。7の壺は第14図R2で、4と同様に床面から浮いた状態で出土した。胴部下半には焼成後に小孔が穿たれている。また、底部も粘土が剥がれたように孔があいている。外面はハケ調整の後、ヘラミガキがほどこされている。胎土には石英粒が含まれ、明赤褐色を呈する。9は石材不明の石庖丁である。紐を通す孔は両面から穿孔されている。表面の一部は被熱により剥離している。

SC93（第14図・図版1-2・3-3）

SC88に北東隅をきられ、SC92の北西部を破壊して掘削されている方形の堅穴住居である。北西～南東辺を2m、北東～南西辺を4.5mを検出したが、大部分が調査区外へと続くため、住居の構造は不明である。また、SC92との切りあい関係を見極めることができず、住居の南東側についても確認することができなかった。検出面の標高は9.0mをはかる。覆土は、ローム粒・木炭粒・砂礫を含むやや明るい暗褐色土を主体とする。床面は暗褐色土とロームブロックの混合土によって整地されており、検出面から床面までの深さは約0.2mをはかる。

出土遺物が少ないため、時期の詳細は不明である。

出土遺物（第15図）

1は須恵器碗である。8世紀代のものとおもわれるが、混入の可能性もある。このほかに土師器・弥生土器等が出土したが、細片のため図化し得ない。

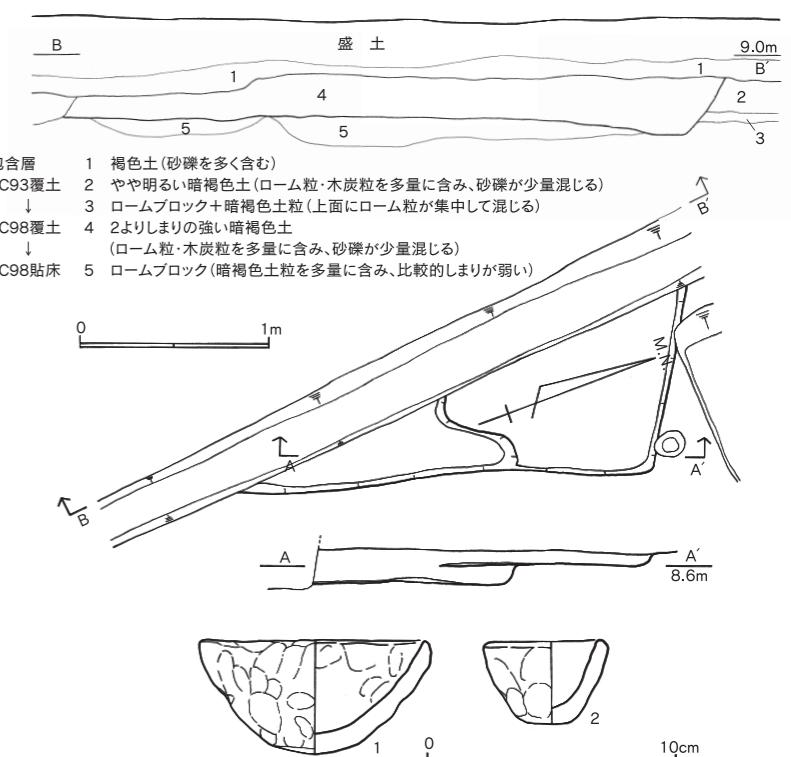
SC98（第16図・図版3-1）

SC92廃絶後に掘削された方形の堅穴住居である。北東隅のみ検出し、大部分が調査区外へと続くため、住居の構造は不明である。北東～南西辺を2.2m、北西～南東辺を1m検出した。検出面の標高は、8.9m前後をはかる。覆土はローム粒・木炭粒・砂礫を含むやや明るい暗褐色土を主体とする。床面は暗褐色土とロームブロックの混合土によって整地されており、検出面から床面までの深さは約0.3mをはかる。

出土遺物が少ないため、時期の詳細は不明である。

出土遺物（第16図）

1・2ともにミニチュアの手捏ね鉢である。1はSP11から出土した片と接合し、2は検出面から出土しており、ともにSC98に帰属するものかどうか疑わしい。1・2ともに、胎土に大粒の石英粒を含み、浅黄橙色を呈する。



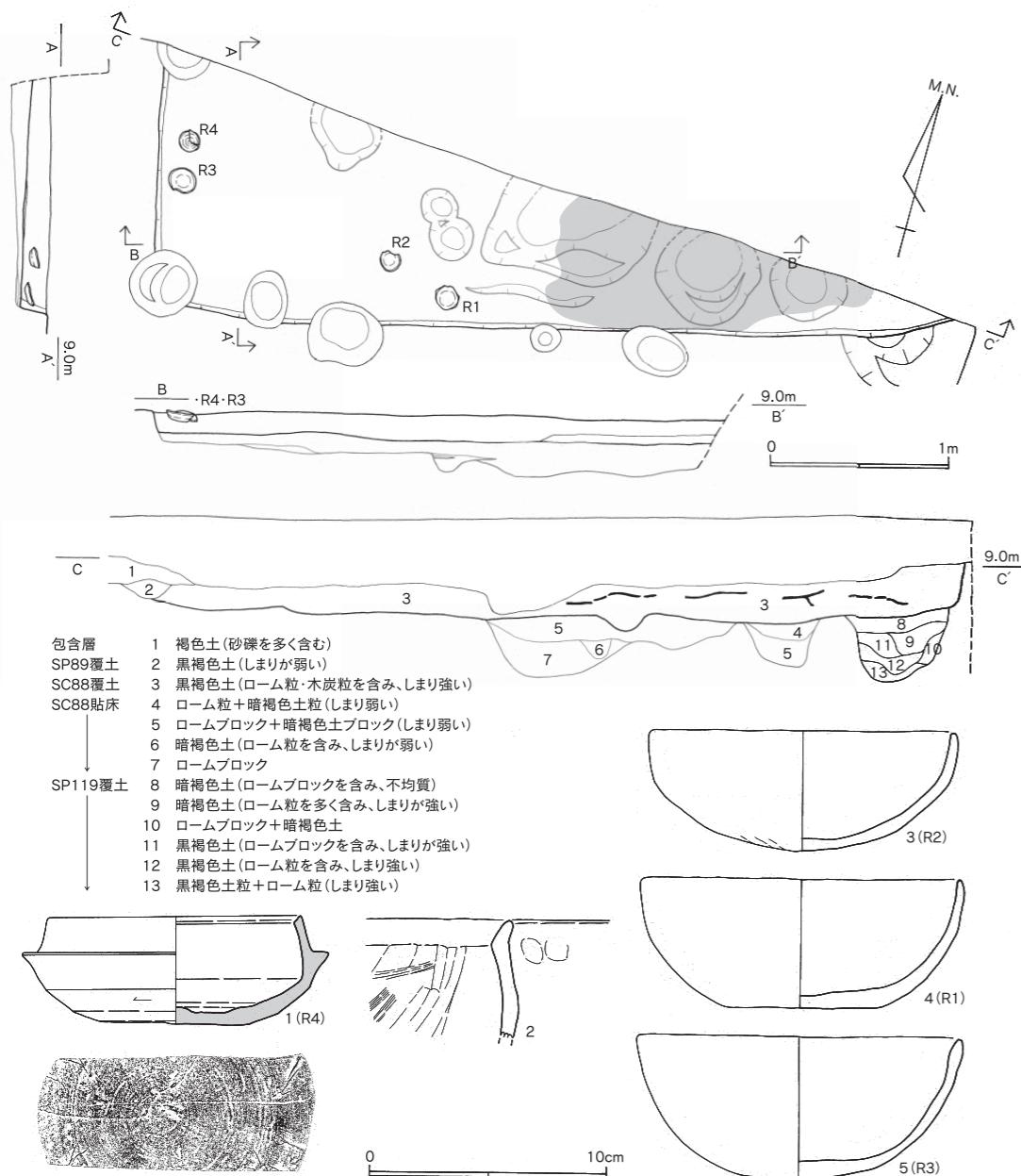
第16図 SC098実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

(2) 古墳時代の遺構と遺物

SC88 (第17図・図版3-2・5)

II区北端に位置する方形の竪穴住居である。SC93の廃絶後に掘削されており、南西隅を中心に、南北辺1.4m、東西辺4.4mを検出したが、大部分は調査区外へと続くため、住居の構造は不明である。検出面の標高は8.9mをはかる。覆土は、ローム粒・木炭粒を含むしまりの強い暗褐色土を主体とし、床面は暗褐色土とロームブロックの混合土で整地している。検出面から床面までの深さは0.15cm~0.2mである。貼床を除去した後、第17図土層4~7に示したような柱穴状の遺構が検出されたが、柱穴とは判断できなかった。

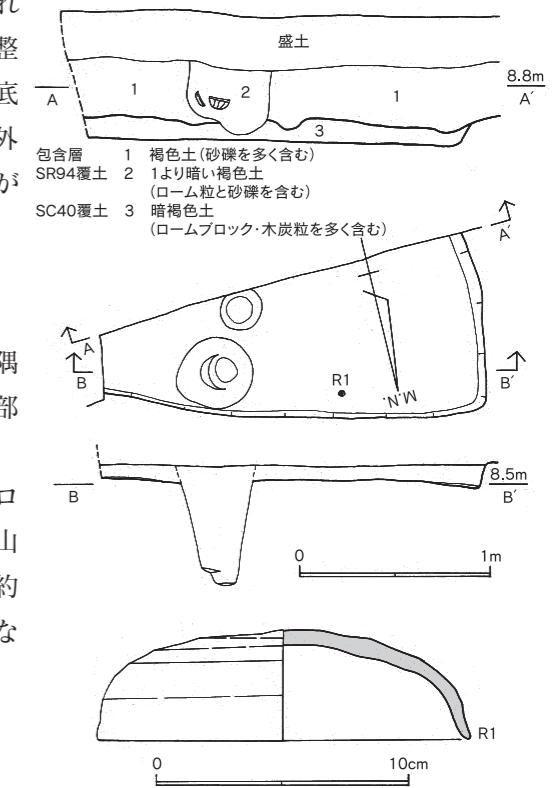
第17図に示したR1~R4は、床面から若干浮いた状態で出土した（第17図-1・3・4・5）。また、東側では、覆土中の標高8.85m付近で（第17図土層3）、図版3-2に示したような、網代状に編まれた炭化物を検出した。これらは床面から遊離しており、住居廃絶後に投棄されたものとおもわれる。出土遺物から6世紀前半の竪穴住居と考えられる。



第17図 SC88実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第17図)

1はR4で、須恵器坏身。外底面にヘラ記号を有する。外面のヘラケズリの範囲は広く、受け部の端部は面取りされ、体部外側から内側にかけて自然釉が付着している。2は土師器甕。内面はヘラ状工具でナデ調整されている。3・4・5はそれぞれR2・R1・R3で、土師器坏である。5は磨滅著しく調整を観察することはできないが、3・4は体部下半から底部はヘラケズリがほどこされる。3~5は共通して、外側に被熱による剥離がみられ、内側にもコゲまたは煤が付着している。



第18図 SC40実測図 (S=1/40)
出土遺物実測図 (S=1/3)

SC40 (第18図・図版2-1・2)

I区南東部に位置する方形の竪穴住居である。北西隅を中心に、南北辺0.9m、東西辺2mを検出したが、大部分は調査区外へと続くため、住居の構造は不明である。

検出面の標高は8.6mをはかる。覆土は、ロームブロック・木炭粒を含む暗褐色土を主体とする。床面は地山で貼床されない。検出面から床面までの深さは約0.15cmである。検出できた範囲では、主柱穴や壁溝などは確認されなかった。

出土遺物が少ないため、時期の詳細は不明である。

[出土遺物 (第18図)]

R1は第18図に示した位置で床面から浮いた状態で出土した。6世紀後半のもので、焼成があまく、灰白色を呈する。

(3) 古代の遺構と遺物

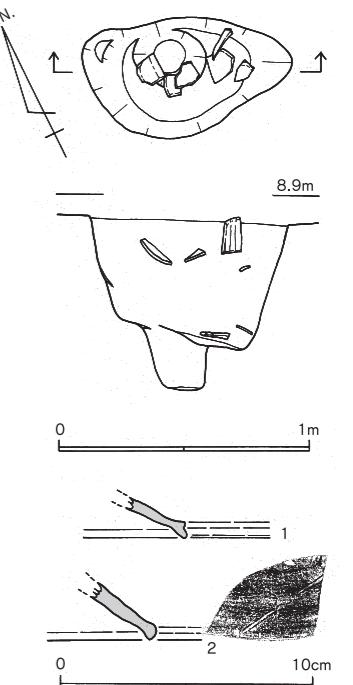
SK44 (第19図・図版4-1・2)

I区中央部に位置する土坑である。北西-南東方向を長軸とする不整橿円形を呈する。検出面の標高は8.7m前後で、短軸0.65m、長軸1.15mをはかる。検出面から0.7mの深さで平坦面をなし、そこからさらに円形の柱穴が掘削されている。円形の柱穴の底部までの深さは0.9mをはかる。

覆土は砂礫を多量に含むやや明るい暗褐色土を主体とする。平坦面から掘りこまれる円形の柱穴は柱痕跡と考えられ、SK44は掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が高い。周囲の遺構を検討したが、建物としてまとめることはできなかった。

[出土遺物 (第19図)]

1・2は須恵器である。蓋かあるいは高坏の脚部か。小片であるため、傾き等に誤認がある可能性がある。2の外側にはヘラ記号のようなものが刻まれている。このほかに、土坑の上層から下層まで偏り



第19図 SK44実測図 (S=1/40)
出土遺物実測図 (S=1/3)

なく瓦が出土した。これらの瓦については、「(7) 那珂遺跡群第131次調査出土瓦について」で詳細に報告する。

SB128

(第20図・図版3-6)

II区中央部に位置する、主軸を南西-北東方向による掘立柱建物である。柱穴3基のみの検出にとどまったことと、調査担当者の検討不足で、SC92の掘削途中で検出したため、柱穴や建物の規模や構造、時期等をあきらかにすることはできなかつた。検出面の標高は8.7m前後である。

柱穴は直径0.75m～

1mをはかる不整円形をなし、検出面から0.1m～0.45mの深さで平坦面をなし、そこから直径0.2m～0.4mをはかる柱痕跡が円形の柱穴状にのこる。検出面から柱痕跡底面までの深さは0.45m～0.65mで、柱痕跡の底面や柱穴掘方平坦面の標高は一定ではない。柱間距離は1.7m～1.9mをはかる。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土を主体とする。掘削途中で平面的に柱痕跡を検出することはなかつた。

梁行または桁行はおそらく北側の調査区外へ展開すると考える。出土遺物が少ないため時期の詳細は不明であるが、6世紀後半以降の掘立柱建物であると考えられる。

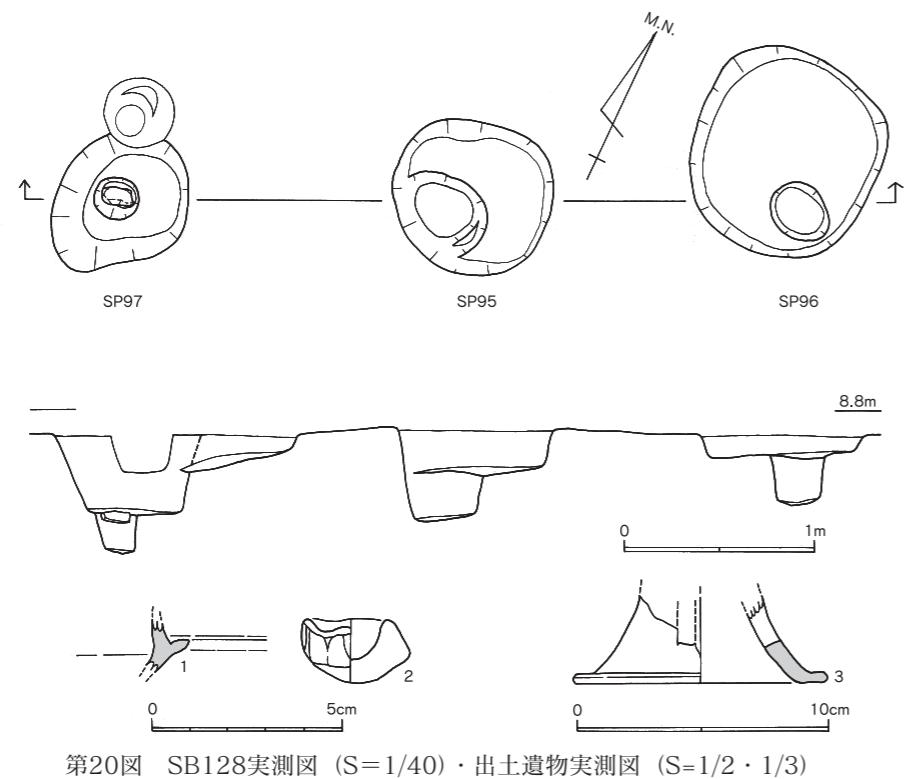
出土遺物 (第20図)

1はSP97から出土した須恵器环身である。2はSP97検出面から出土した、ミニチュアの手捏ね鉢である。粘土の小塊を、真上から指で押されたような形態をなす。胎土には大粒の石英粒を少量含み、明赤褐色を呈する。3はSP96から出土した須恵器高環の脚部である。4カ所に長方形の透かしを有する。

(4) 中世の遺構と遺物

SD42 (第21図)

I区西端に位置する溝で、主軸をほぼ南北方向にとる。東端を攪乱にきられ、北端は調査区外へと続く。検出面の標高は8.6m前後で、幅は0.6m、検出長は4.8mをはかる。西側に犬走りのような幅0.2mの平坦面をもうけている。検出面から平坦面までの深さは0.2m、底部までの深さは0.52mをはかる。



第20図 SB128実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

覆土は砂礫を多く含む灰褐色土を主体とし、底面に近いほどローム粒を含む。

出土遺物 (第21図)

1～3は須恵器环身である。1の内底部は静止横ナデで仕上げられている。2は焼成が甘く、灰白色を呈する。3は検出面から出土した。外面に自然釉がかかり、受け部には焼成時に重ね焼きされたとおもわれる蓋の口縁部片が付着している。内底部は当て具痕跡が観察できる。

SR94 (第4・22図・図版2-5)

調査区南西端で検出した中世の土坑墓である。SC40の調査時に、調査区南壁土層を検討したところ、包含層上面から掘削されたSR094を発見した(第18図)。調査区南壁土層に副葬品とみられる青磁碗や土師器环がみられたことから、I区埋め戻し後、この部分のみを拡張して調査を行つた(第4図)。

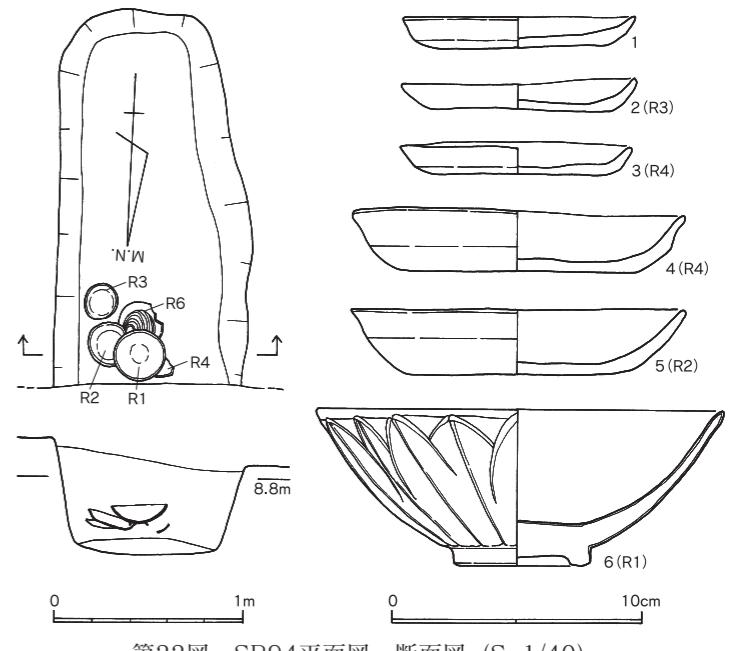
狭い部分を拡張して墓壙の検出を行つたため、第22図に示した墓壙は正確なものではない可能性が高い。主軸はほぼ南北方向であると推定される。調査区南壁土層から、検出面の標高は8.9mで、墓壙の幅は0.45m、検出面からの深さは0.35mであることがわかる(第4図)。覆土はローム粒と砂礫を含むやや明るい暗褐色土を主体とする。調査区南壁土層を検討した結果、木棺痕跡等は確認されなかつた。副葬品の位置から頭位は北であったと推測される。

出土遺物から13世紀前半の土壙墓

と考えられる。

出土遺物 (第22図)

2～6はすべて第14図に出土位置を図示したものである。1～3は土師器小皿。2はR3、3はR4で、ともに底部は糸切りにより切り離され、板目ものこる。4・5は土師器环で、それぞれR6、R2である。4・5ともに、底部に糸切りの痕跡と板目が観察できる。5は、内面底部を定方向ナデで仕上げている。6は龍泉窯系青磁碗I類である。黄味の強い緑乳色の釉をほどこすが、畳付から外底部は露胎である。

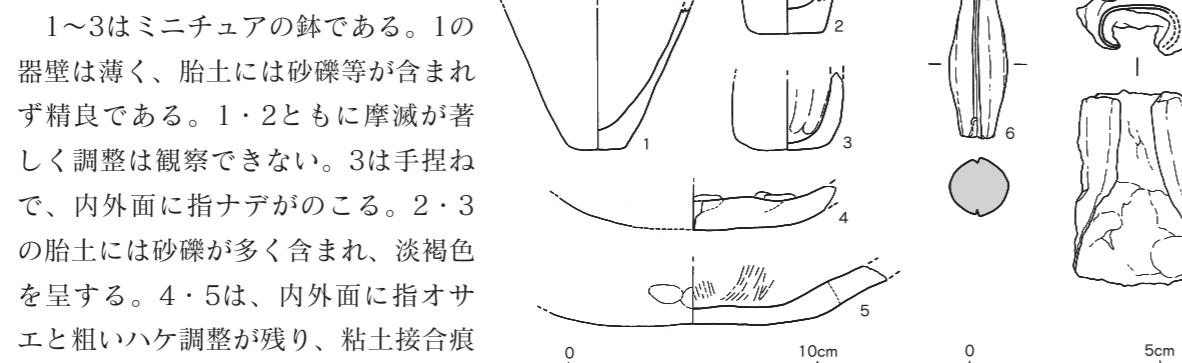


第22図 SR94平面図・断面図 (S=1/40)
出土遺物実測図 (S=1/3)

(5) 包含層と出土遺物

すでに述べたように、鳥栖ローム遺構面の標高は9.0m～8.65mをはかり、北から南へ傾斜しており、この上層に、砂礫を多く含む褐色包含層が層厚10cm～30cm程度堆積していた。包含層上面からは、13世紀前半の中世墓SR094が掘削されていることから、褐色包含層は13世紀までに形成されたものであると考えられる。包含層からは第23図に示した遺物以外に、瓦がコンテナケース10箱分出土している。とくに、I区北側Y地点では、丸瓦の瓦当が第25図-1・2・卷頭図版1・2に示したようにかたまって出土した。遺構検出を数度試みたが、これらの瓦が遺構にともなうものかどうかはわからなかつた。詳細は「(7) 那珂遺跡群第131次調査出土の瓦」で述べる。

出土遺物（第23図）



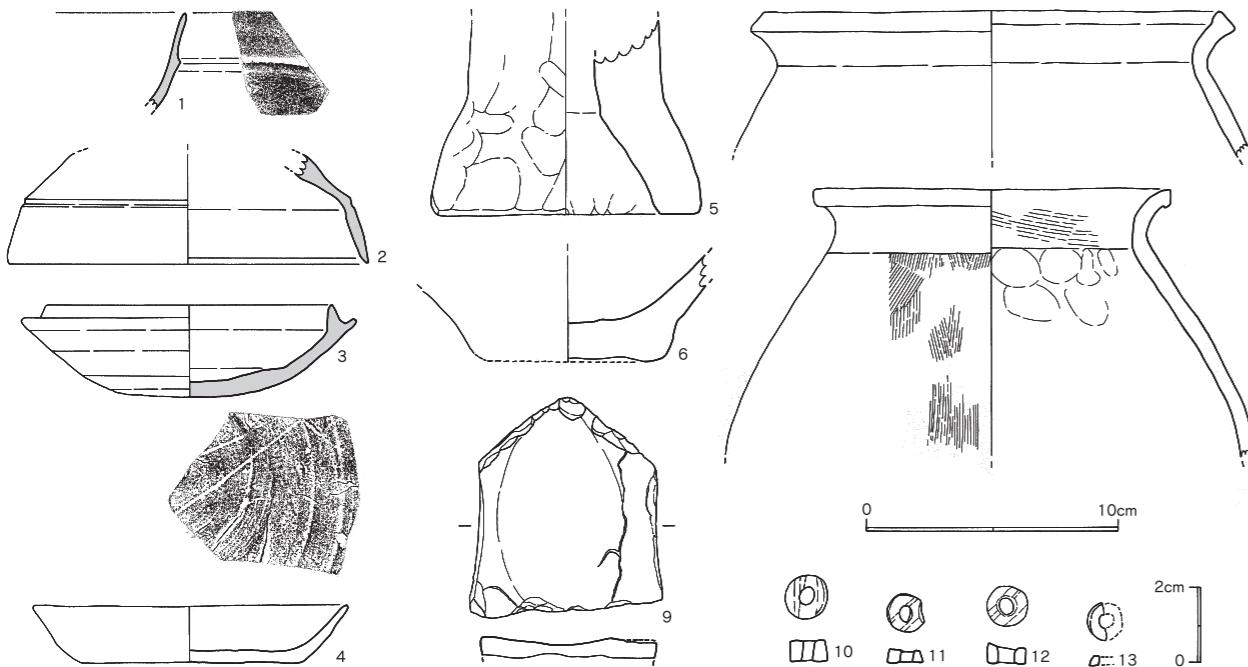
第23図 包含層出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

1～3はミニチュアの鉢である。1の器壁は薄く、胎土には砂礫等が含まれず精良である。1・2ともに摩滅が著しく調整は観察できない。3は手捏ねで、内外面に指ナデがのこる。2・3の胎土には砂礫が多く含まれ、淡褐色を呈する。

4・5は、内外面に指オサエと粗いハケ調整が残り、粘土接合痕が観察できる。全体的につくりが粗雑な印象である。色調も外面が暗褐色、内面が暗橙色と共通する。土師器の甕底部か。6は暗灰色を呈する須恵質の土錘。重量は10.8gをはかる。7は鍛造鉄斧である。メタル反応はない。袋部の幅は2.1cm、刃部の幅は3cmをはかる。

(6) そのほかの出土遺物（第24図）

1はSP007から出土した須恵器高坏である。突帯の下には櫛描の波状文がめぐる。小片のため傾きに誤りがある可能性がある。2はSP041から出土した須恵器坏蓋である。稜線は凹線状となっている。3はSP96から出土した須恵器坏身で、外底部にヘラ記号を有する。4・6はSP032検出面から出土した。4は土師器坏。摩滅しており調整は観察できない。6は弥生土器甕である。5はSP112から出土した、筒状の胴部をもつ器台。内外面ともに指オサエが顕著にのこる7・8は頸部のしまる甕で、ともに胎土に大粒の砂礫を含み、淡黄橙色を呈する。7はSP43、8はSP125から出土した。9は砂岩製砥石で、中央部が緩やかに凹む。両端部も砥面として使用している。10～13は滑石製臼玉。10・12はSP69、11はSP005、13はSD049から出土した。これらの遺構はみなI区に位置している。

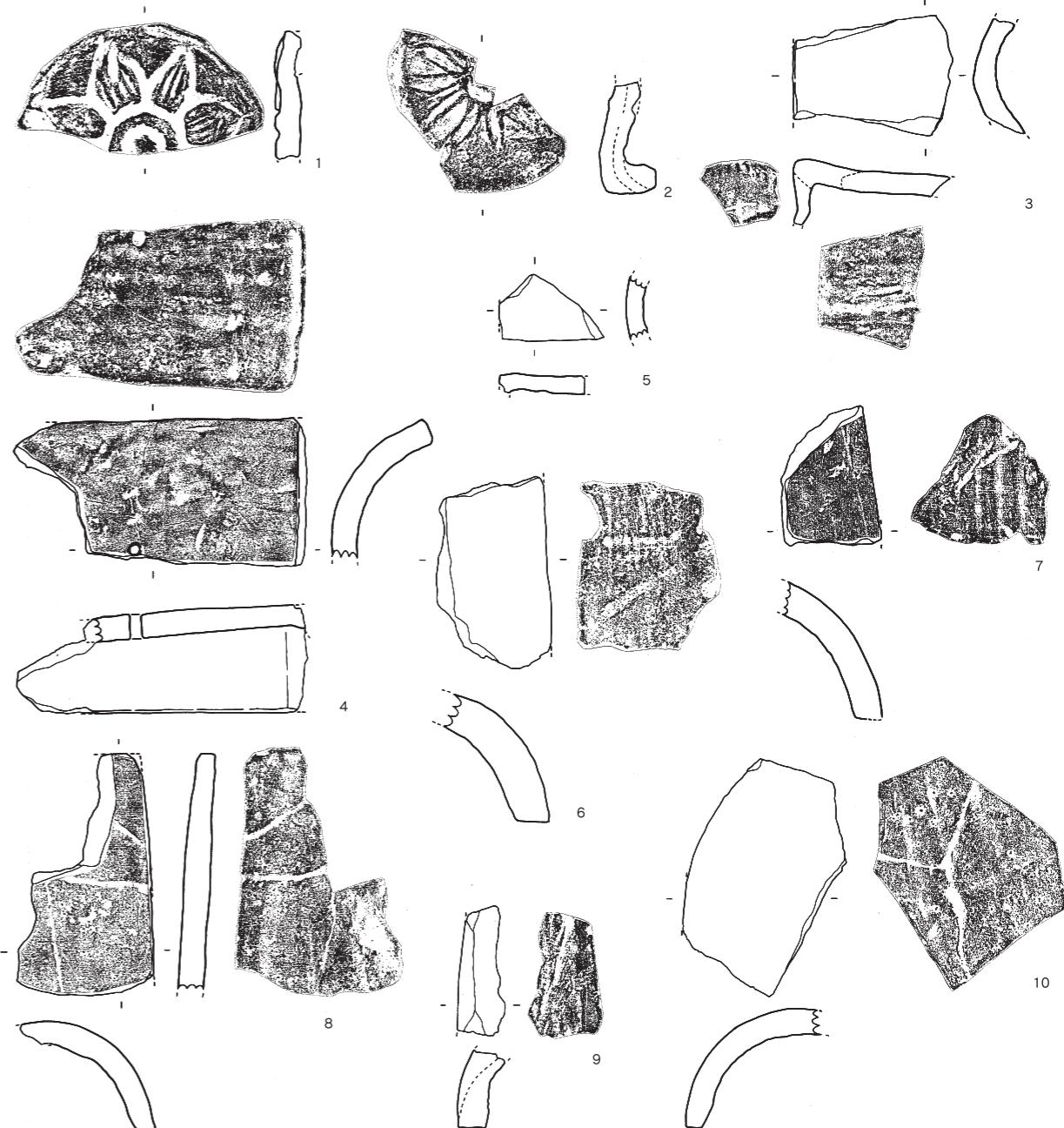


第24図 そのほかの出土遺物測図 (S=1/3)

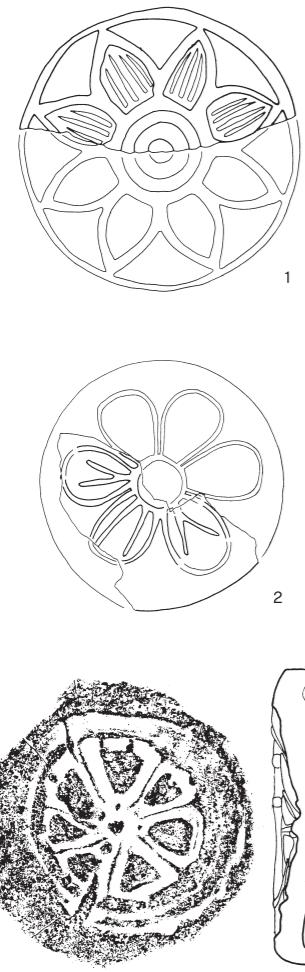
(7) 那珂遺跡群第131次調査出土瓦について

那珂遺跡群第131次調査では、約1300点（面積で約19,000cm²）の瓦片が出土した（註1）。その半数は包含層から出土したが、遺構ではSK044やSK035に集中する。特にSK044からは比較的大きな破片がまとまって出土した。出土瓦の大部分は小破片であったため、種類を特定できたのは全体の半数にあたる534点である。種類別の内訳は軒丸瓦6点、丸瓦198点、平瓦330点である。紙面の都合上、以下では出土瓦の特徴を総括的に述べる（詳細は第1・2表を参照のこと）。

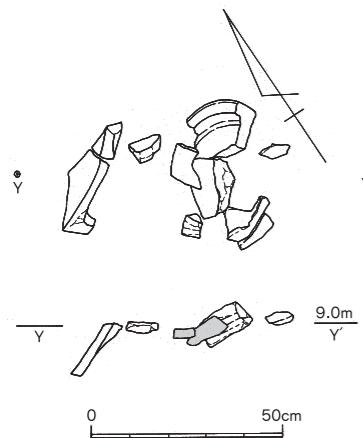
軒丸瓦 瓦当部が3点（第25図1～3）、丸瓦部が2点（第25図4・5）のほか、「泥条盤築法」で製作された無文軒丸瓦（いわゆる「神ノ前タイプ」）1点（未図化）が出土した。1・2はこれまでに類例のない文様である。1は素弁蓮華文軒丸瓦で、現状では4葉が確認できるが、復元すると8葉



第25図 出土瓦実測図① (1/4)



第26図 軒丸瓦瓦当文様復元図 (1/4)



第27図 包含層R-1 (第25図1・2)
出土状況 (1/40)

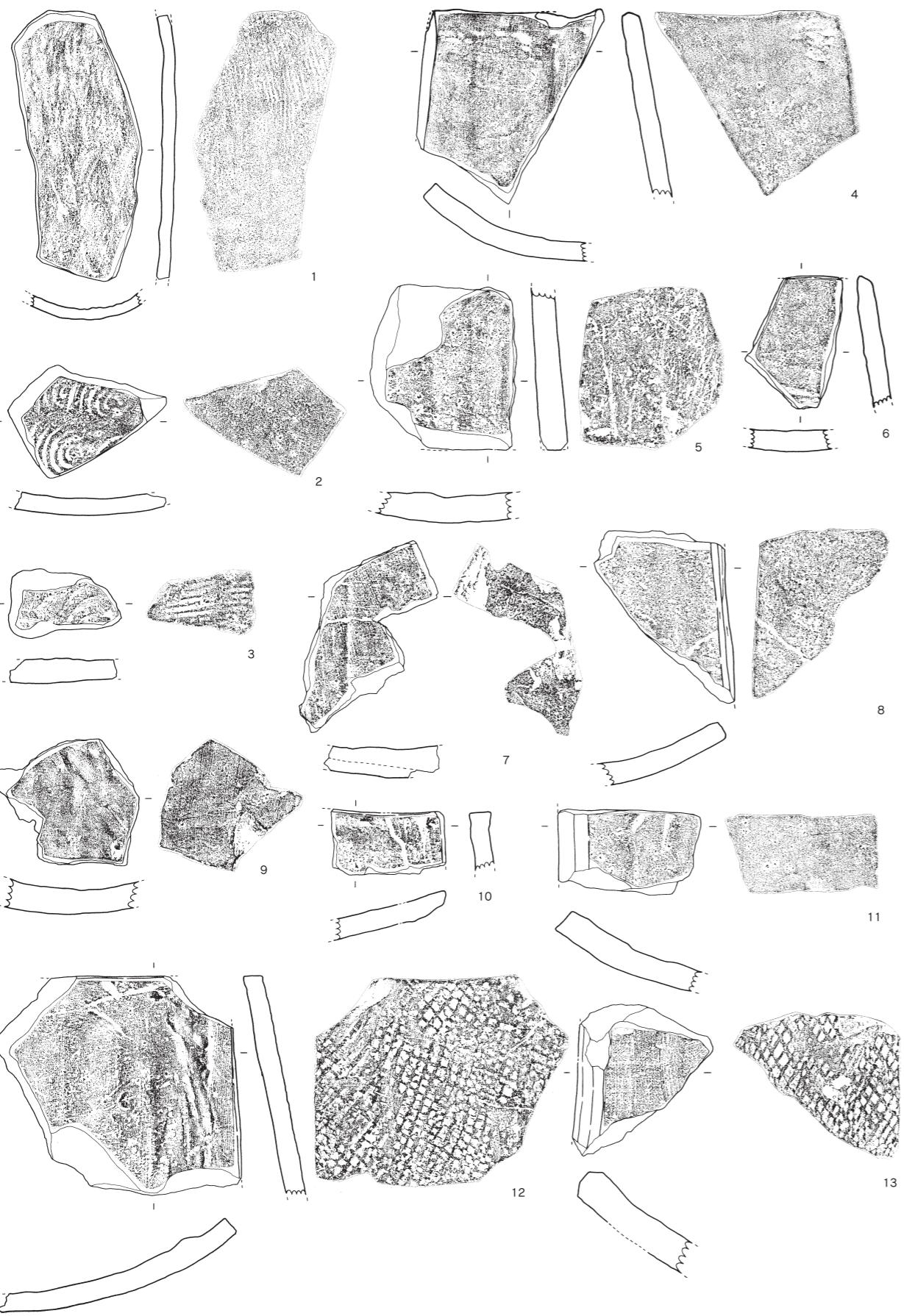
となる（第26図1）。蓮弁は尖弁で、「高句麗瓦」に特徴的な蓮瓣文を表現する。間弁は扇形である。中房は直径1.5cmの小円球状で、周囲に幅1cmの圈線を巡らす。外縁は確認できない。文様は木範で施文されたと考えられ、蓮弁や間弁の凹凸表現が著しい。丸瓦部の剥離状況からみて、瓦当面から粘土紐を積み上げて丸瓦部を成形する「泥条盤築技法」で製作された可能性が高い。2は蓮弁に2つの子葉を配す蓮華文軒丸瓦で、現状では3葉確認できるが、復元すると6葉となる（第26図2）。子葉は、2本線で表現されたものとY字形のものの2種類があり、交互に配される可能性もある。瓦当裏面下端には周堤状の突帯が巡るが、これは「泥条盤築技法」で瓦当部から粘土紐を積み上げて円筒状の丸瓦部を作ったのち、不要な部分を半裁して切り取った痕跡と考えられる。3は那珂34次那珂八幡古墳周溝出土例と同範品の可能性がある（第26図3）。瓦当面と丸瓦部との接合部の境が不明瞭で、丸瓦部凹面に竹状模骨痕を残すことから、瓦当裏面に竹状模骨を設置して粘土紐を積み上げて一体的に成形した可能性が高い。4・5は瓦当部が破損のため不明で、凹面に竹状模骨痕を残す。4は広端部から11cm付近に釘孔を1孔穿つ。他の軒丸瓦に比べて作りが良いため、「百濟系」单弁軒丸瓦に伴う丸瓦の可能性が高い。

丸瓦 全体の約90%が橙・黄色系統の色調、焼成軟質の土師質あるいは瓦質を呈す。全体的に摩滅が著しい。凹面には竹状模骨痕を残すものが多い。また、凸面は大部分が縦方向に丁寧にナデ調整されるか摩滅しており、叩打痕が残るものは全体の5%に満たないが、目の細かい長方形の格子目（細格子）、平行文、平行文の間の木目が浮き出た擬格子目がある。また、8世紀代と考えられる縄目叩きの丸瓦がSK035から出土している。

平瓦 色調・焼成は、丸瓦と同様である。大部分が桶巻作りで、糸切り痕を残すため粘土板製と判別できる資料もある（第29図6・7・12）。一方で、第28図11・15等は模骨や布目の痕跡が明らかに存在しないため、粘土紐積み上げ技法で製作された可能性が高い。また、11は狭端部を土器口縁のように丸く仕上げる、初期瓦に特徴的な形態を持つ。第29図1～3は凹面に同心円文当て具痕が残る。同心円文当て具を使用する場面としては、模骨を使用せず粘土紐巻き上げ技法で成形した後の叩き締めと、模骨桶で成形して桶から外した後の補足的な叩き締めの2つの可能性が想定されるが、3は凹面に模骨の連結紐の圧痕が残るため、後者と考えられる。凸面の叩打痕の種類は丸瓦と同様であるが、8世紀代と考えられる正格子目や斜格子目（第29図12・13）の平瓦が包含層やSK044から出土した。



第28図 出土瓦実測図② (1/4)



第29図 出土瓦実測図③ (1/4)

第1表 那珂遺跡群第131次調査丸・平瓦出土点数
丸瓦

遺構名	点数	(%)	面積 (cm ²)	(%)	焼成			色調					凸面			凹面 竹状模骨	
					堅緻	硬	軟	橙	黄橙	黄・灰白	灰	青灰	細格子	擬格子	平行	縄目	
包含層	95	48.0%	1845	47.1%	1	5	89	56	14	20	3	1	1	3	3	35	
SC63・092	4	2.0%	70	1.8%		1	3				3	1				2	
SD042	6	3.0%	90	2.3%		1	5	4	1								
SK035	40	20.2%	460	11.7%		2	38	18	1	18	3				1	1	
SK044	8	4.0%	375	9.6%			8	1	3	4						3	
SK108	1	0.5%	20	0.5%			1				1					1	
SR094	3	1.5%	45	1.1%			3	1	2							1	
ピット	23	11.6%	395	10.1%	1	3	19	8	4	6	3	2				2	
表土等	18	9.1%	615	15.7%	1	1	16	8	1	8	0	1	1	1		3	
小計	198		3915		3	13	182	97	26	60	10	5	2	4	4	1	52
					1.5%	6.6%	91.9%	49.0%	13.1%	30.3%	5.1%	2.5%					

遺構名	点数	(%)	面積 (cm ²)	(%)	焼成			色調					凸面			凹面 同心円文	
					堅緻	硬	軟	橙	黄橙	黄・灰白	灰	青灰	細格子	擬格子	平行	縄目	
包含層	180	54.5%	3505	47.4%		3	177	95	37	45	2		2	2	8	2	2
SC015・092	4	1.2%	140	1.9%			4	1	2	1							
SD42	5	1.5%	100	1.4%			5	3	1		1						
SK035	48	14.5%	950	12.8%		3	45	23	4	15	6		1	4	2		1
SK044	9	2.7%	515	7.0%	1		8	5	2		1	1	1	1		1	
SK045・108	2	0.6%	20	0.3%			2	1	1								
SR094	9	2.7%	120	1.6%			9	6	1	2							
ピット	42	12.7%	850	11.5%	3	1	38	17	10	10	2	3	1				
表土等	31	9.4%	1195	16.2%	1	2	28	13	4	10	3	1	1	1	1	2	1
小計	330		7395		5	9	316	165	62	83	15	5	6	8	11	5	4
					1.5%	2.7%	95.8%	50.0%	18.8%	25.2%	4.5%	1.5%					

第2表 那珂遺跡群第131次調査出土瓦観察表

fig No.	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	色調	焼成	特徴								
25 1	褐色包含層R-1	軒丸瓦(瓦当)	瓦当径 (14.6)	1.6	浅黄橙	軟	素弁8葉蓮華文(高句麗系蓮華文)	泥条盤築技法								
〃 2	褐色包含層R-1	"	瓦当径 (13.4)	1.6	黄橙	軟	蓮華文	泥条盤築技法								
〃 3	包含層	"	9.7	7.3	1.3	浅黄	軟	凹面竹状模骨痕	一体式							
〃 4	褐色包含層R-1	軒丸瓦(丸瓦)	17.7	8.5	1.5	橙	硬	凹面竹状模骨痕	一体式	釘孔1か所						
〃 5	1区機械掘削	"	6.4	4.2	1.1	灰白	硬	凹面竹状模骨痕	一体式							
〃 6	包含層	竹状模骨丸瓦	11.7	9.7	2.5	浅黄	軟	側面凹面側を薄く面取り	凸面丁寧なナデ							
〃 7	SP016	"	8.5	10.5	1.8	灰黄	軟	側面縁面取りなし	凸面丁寧なナデ							
〃 8	褐色包含層R-1	"	14.6	11.5	1.6	淡黄	軟	側面凹面側を面取り	凸面丁寧なナデ							
〃 9	SC92	"	7.9	4.9	1.9	オリーブ灰	硬	側面凹面側を面取り	凸面丁寧なナデ							
〃 10	包含層	"	14.4	11.7	1.6	浅黄橙	軟	側面凹面側を面取り	凸面丁寧なナデ							
28 1	SK044	"	11.9	8.9	1.8	橙	軟	広端部より2cm上に模骨端部	凸面丁寧なナデ							
〃 2	SK044	"	12.1	10.3	1.4	橙	軟	凸面丁寧なナデ								
〃 3	SP030	"	6.5	8.2	1.6	橙	軟	凸面平行文(擬格子)タタキ								
〃 4	SK044	"	9.8	14.2	1.4	浅黄橙	軟	凸面丁寧なナデ								
〃 5	包含層	"	5.8	6.7	1.4	黄橙	軟	凸面平行文タタキ								
〃 6	SK035	"	10.9	7.3	1.8	浅黄橙	軟	凸面平行文タタキ	側面凹面側を面取り							
〃 7	包含層	"	7.7	6.1	1.3	橙	硬	凸面平行文(擬格子)タタキ	糸切痕							
〃 8	1区機械掘削	"	11.0	4.7	1.3	灰	堅緻	凸面平行文(擬格子)タタキ	凹面ナデ							
〃 9	包含層	"	4.8	7.2	1.2	橙	軟	凸面平行文(擬格子)タタキ								
〃 10	SK035	丸瓦	7.2	5.8	1.4	灰	軟	凸面縄目タタキ								
〃 11	SP030	平瓦	6.6	8.1	2.0	浅黄橙	軟	狭端部土器口縁調整	模骨・布目痕跡なし							
〃 12	包含層	"	4.5	2.3	1.7	浅黄橙	軟	凸面平行文タタキ								
〃 13	1区機械掘削	"	15.6	11.6	2.0	灰白	軟	桶巻作り	凸面平行文タタキ							
〃 14	SK035	"	6.5	10.1	1.4	浅黄橙	軟	凸面平行文タタキ	模骨・布目痕跡なし							
〃 15	1区機械掘削	"	5.4	6.0	1.5	浅黄	軟	凸面平行文(擬格子)タタキ	模骨・布目痕跡なし							
〃 16	SK035	"	6.1	7.4	1.8	浅黄橙	軟	凸面平行文タタキ								

このように、那珂131次出土瓦には「神ノ前タイプ」、「泥条盤築技法」、粘土紐積み上げ技法、桶巻作り後の補足的な叩き締め等々、6世紀末から7世紀中頃にかけて生産された初期瓦の一群が多く含まれていた。さらに、これまでに類例のない軒丸瓦2種（第25図1・2）も確認された。特に1は「高句麗系」と分類される蓮華文で（註2）、同じく「高句麗系」とされる大野城市月ノ浦I号窯跡出土の「月ノ浦タイプ」軒丸瓦と製作技法が類似することから、ほぼ同じ時期（7世紀前半）の所産と位置付けられる。また、初期瓦のような稚拙な製作技法ではなく、比較的作りが良い竹状模骨丸瓦や桶巻作り平瓦も見られる。破片資料のため初期瓦と明確に区別することは難しいが、これらの瓦は那珂遺跡群や井戸B遺跡周辺に分布する「百濟系単弁」軒丸瓦に代表される一群に属するものと考えられ、7世紀後半から末頃に位置付けられよう。一方、包含層やSK035・044では、縄目や正格子・斜格子目叩きなど奈良時代の瓦が初期瓦と供出する。よって、出土瓦には6世紀末から8世紀代まで100年以上の時期幅が生じることになる。出土状況からみて、おそらく8世紀代にこの周辺で大規模な造成が行われ、整地土や遺構の埋土に古い時代の瓦が混入したものと考えられる。これらの瓦が本来どこでどのような建物に使用されたのかは、今後の検討課題としたい。（比嘉）

（註1）完形の平瓦1枚（狭端巾40cm、広端巾50cm、高さ40cm）を1,800cm²、丸瓦1枚（狭端巾30cm、広端巾40cm、高さ40cm）を1,500cm²と仮定すると、平瓦で約10枚分、丸瓦で約12枚分に相当する。

（註2）蓮華文や尖弁蓮華文は、4～5世紀の高句麗に系譜が迫れ、高句麗の影響を受けた新羅でも6～7世紀にかけて盛行する。よって、7世紀前半の北部九州の初期瓦に見られる「高句麗系」蓮華文は、新羅を経由した間接的な影響と筆者は考える。（比嘉えりか2008『新羅の瓦』『考古学ジャーナル』No.576）

3.まとめ

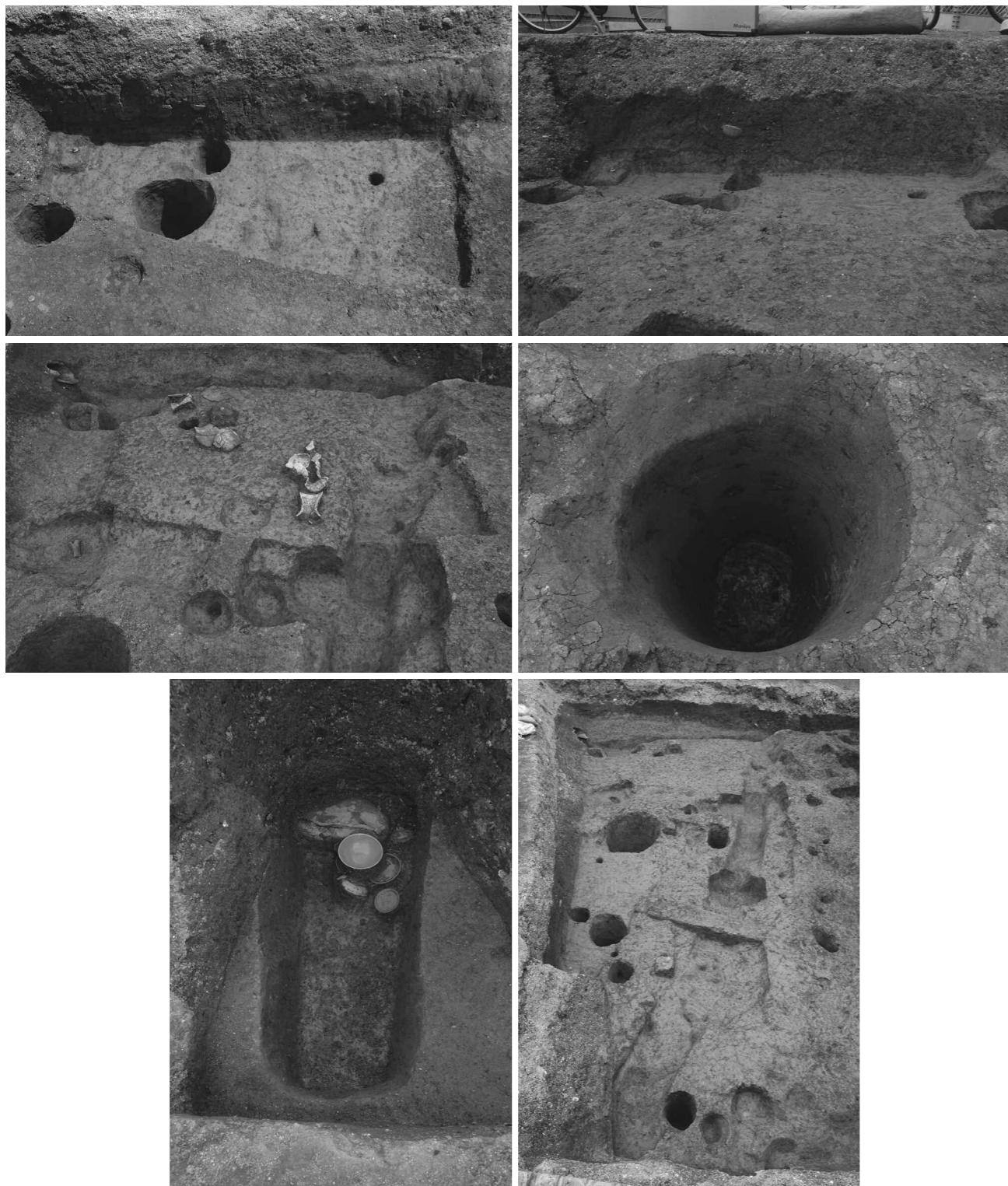
本調査では、弥生時代後期の井戸・竪穴住居、6世紀代の竪穴住居、古代の掘立柱建物や初期瓦が出土した土坑、中世の土壙墓等の多くの遺構を検出することができた。とくに、SC88は古墳時代後期でも古い時期の竪穴住居と考えられ、那珂遺跡群において生活遺構が減少している時期のものである。

また、13世紀代までに堆積したと考えられる、鳥栖ローム上層の包含層からは、須恵器・土師器・弥生土器のほかに、第25-1～第29図に図示したような初期瓦の軒丸瓦を含む、コンテナケース10箱分の瓦が出土した。冒頭で述べたように、本調査区の北側は、周辺よりも標高の高い平坦地が存在し、115次調査において、7世紀代の大型掘立柱建物等が確認され、初期瓦が出土したことから、この平坦地に瓦葺き建物が展開していた可能性が指摘されている（福岡市教育委員会編2008『那珂50－那珂遺跡群第115次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集）。本調査地点は、115次調査と比較すると遺構面の標高は、約0.8m低くなっている。以上のことから、本調査地点の初期瓦を含む包含層は、北側の平坦地からもたらされた可能性が高い。さらに、本調査で検出したSB129は、柱穴が1m弱の大型のもので、出土遺物と覆土から6世紀後半以降のものと推定される。115次調査で指摘されているように、北側平坦地に瓦葺き建物が展開していたとすれば、何らかの関連が予測されよう。



1 I 区全景（北から）
2 II 区全景（東から）

図版2



1 SC40完掘状況（北から）

3 SC63遺物出土状況（東から）

5 SR94遺物出土状況（南から）

2 SC40・SR4土層（北から）

4 SE03遺物出土状況（東から）

6 SC40・63・SD49完掘状況（東から）

図版3



1 SC98完掘状況（西から）

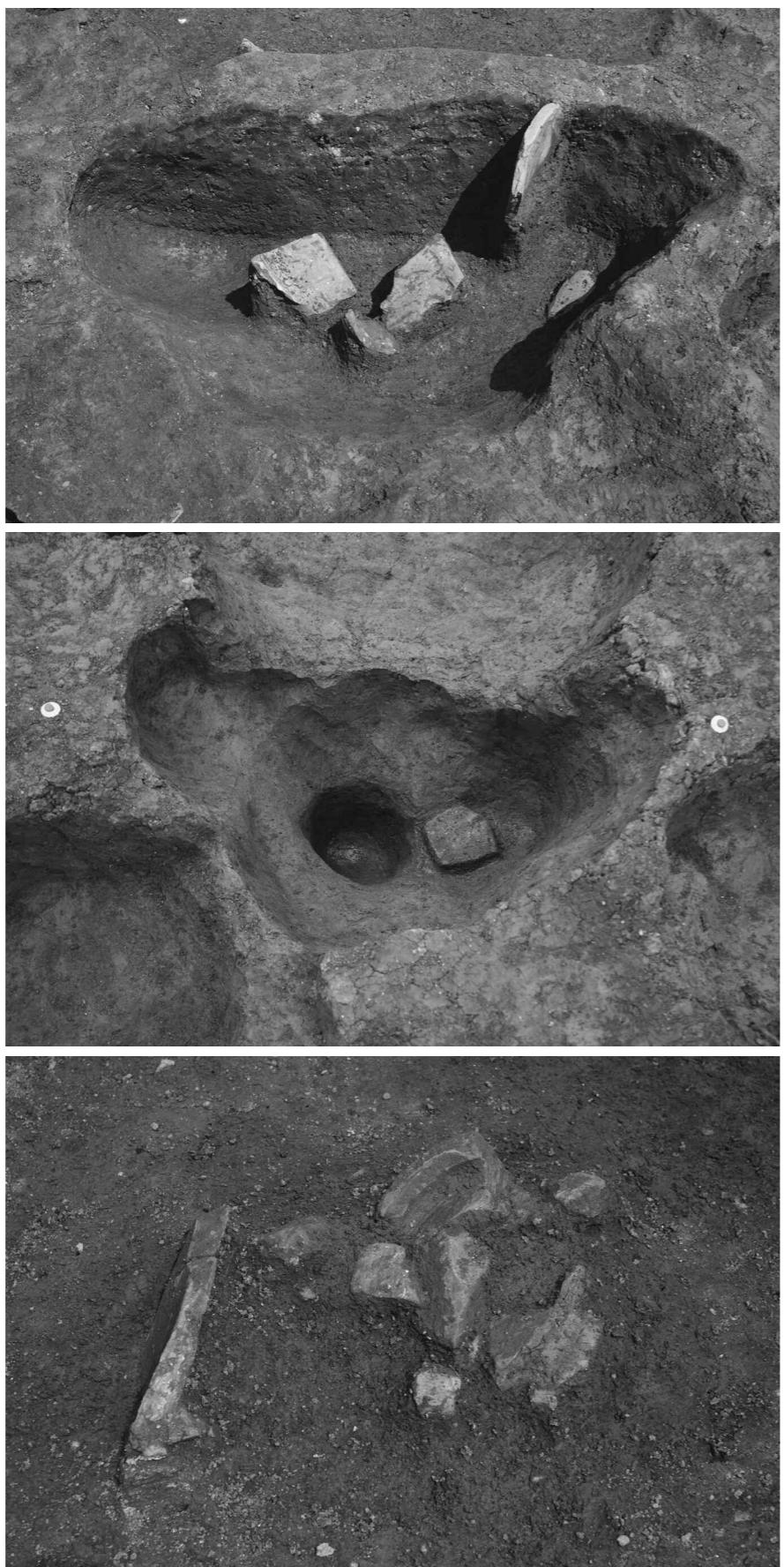
3 SC92貼床検出状況（東から）

5 SC88完掘状況（東から）

2 SC88東半炭化物検出状況（南から）

4 II区西壁土層（南から）

6 SB128（東から）



1 SK44瓦出土状況（南から）
2 SK44完掘状況（南西から）
3 包含層R1出土状況（南東から）

第4章 第134次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成23年7月20日、博多区那珂一丁目336、387、388、389番における専用住宅建設に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた（事前審査番号23-2-356）。その場所は埋蔵文化財包蔵地内（那珂遺跡群）であることから、埋蔵文化財第1課では試掘調査をおこない、現地表下50cm前後で遺跡の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。発掘調査は平成23年9月7日に開始し、10月18日に全ての業務を終了した。今回の調査にあたっては、関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

(2) 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

(1) 平成23年度

調査主体	福岡市教育委員会		
事前審査	埋蔵文化財第1課	課長	濱石哲也
		係長	宮井善朗
		主任文化財主事	加藤良彦
		事前審査係	木下博文
総括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛

(2) 平成24年度

調査主体	経済観光文化局		
総括	埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗
		調査第1係長	常松幹雄
庶務	埋蔵文化財審査課	管理係	古賀とも子 川村啓子
担当	文化財保護課	運用係	藏富士寛
整理作業	大石加代子 萩本恵子		

－例　言－

- ・本章は福岡市教育委員会が、平成23年度に実施した那珂遺跡群第134次調査の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本章における方位は座標北（日本測地系）であり、遺構についてはSB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）といった略号を使用している。
- ・執筆、編集は藏富士がおこなった。
- ・本章に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

遺跡調査番号	1125		遺跡略号	NAK134	
所在地	福岡市博多区那珂1丁目336・387・388・389		分布地図番号	東光寺37	
開発面積	1,101.0m ²	調査対象面積	252.8m ²	調査面積	292.0m ²
調査期間	平成23年9月7日～平成23年10月18日		事前審査番号	22-2-1029	

2. 調査の記録

(1) 調査の概要

今次調査地点は丘陵の中央やや南寄りに位置する。西側には、古墳時代初頭の前方後円墳である那珂八幡古墳がある。周囲では、北側で74・118次調査、北東側で39次調査、東側では5・40次調査など、多くの調査が実施されている。

調査はまず、9月7日に重機による表土剥ぎを行い、GL-50cm（標高8.7m前後）の鳥栖ローム上を遺構面とし、調査を開始した。遺構掘削は人力により、平板による地形測量図（1/200）、遺構・出土遺物の平・断面図（1/10・1/20縮尺）等を作成している。なお、全体写真は高所作業車を用いた。10月15日までに発掘調査を終え、以後周辺測量や土器の洗浄、機材の撤収を行い、18日に全ての業務を終了している。

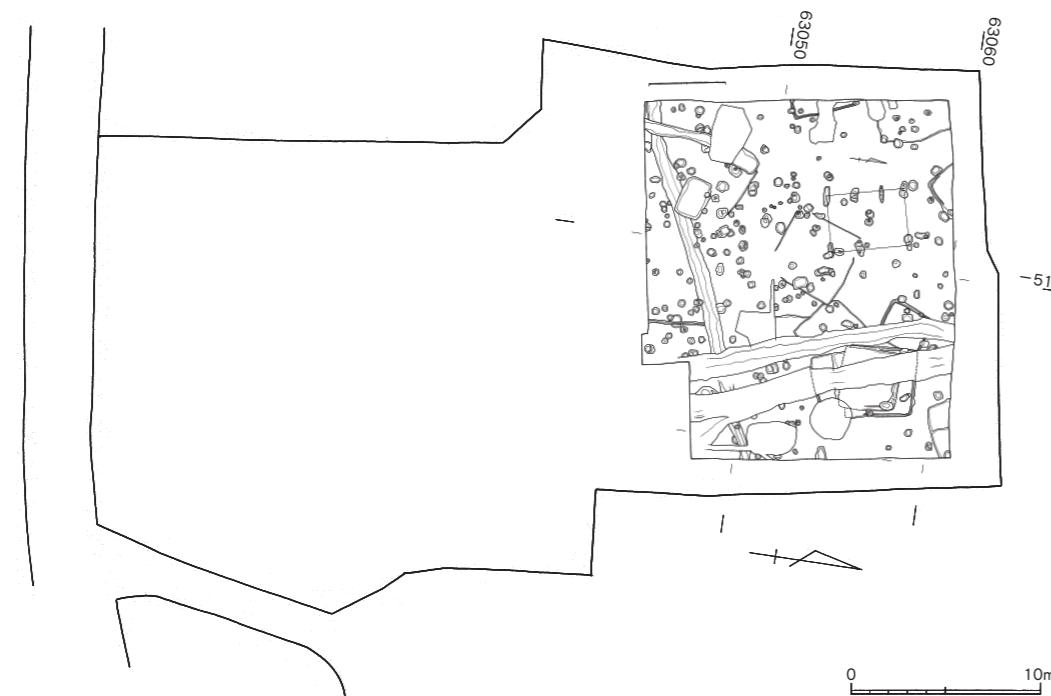
検出した遺構には、竪穴住居（SC）、溝（SD）、掘立柱建物（SB）、土坑（SK）、ピット（SP）がある（第31図）。激しい削平を受けており、いずれの遺構も遺存状況は悪い。以下では、各遺構および出土遺物について、その所見を述べる。

(2) 遺構・遺物

1) 竪穴住居（SC）

SC001（第32図）

調査区北西隅に存在する。調査区内には一部が確認できるのみであり、全形および規模は不明である。住居東辺が長さ4m、南辺が長さ2.3mほど検出できた。住居掘方の深さは10cmに満たず、遺構の遺存状況は悪い。床面は地山の削り出しによるものであり、貼床は確認していない。

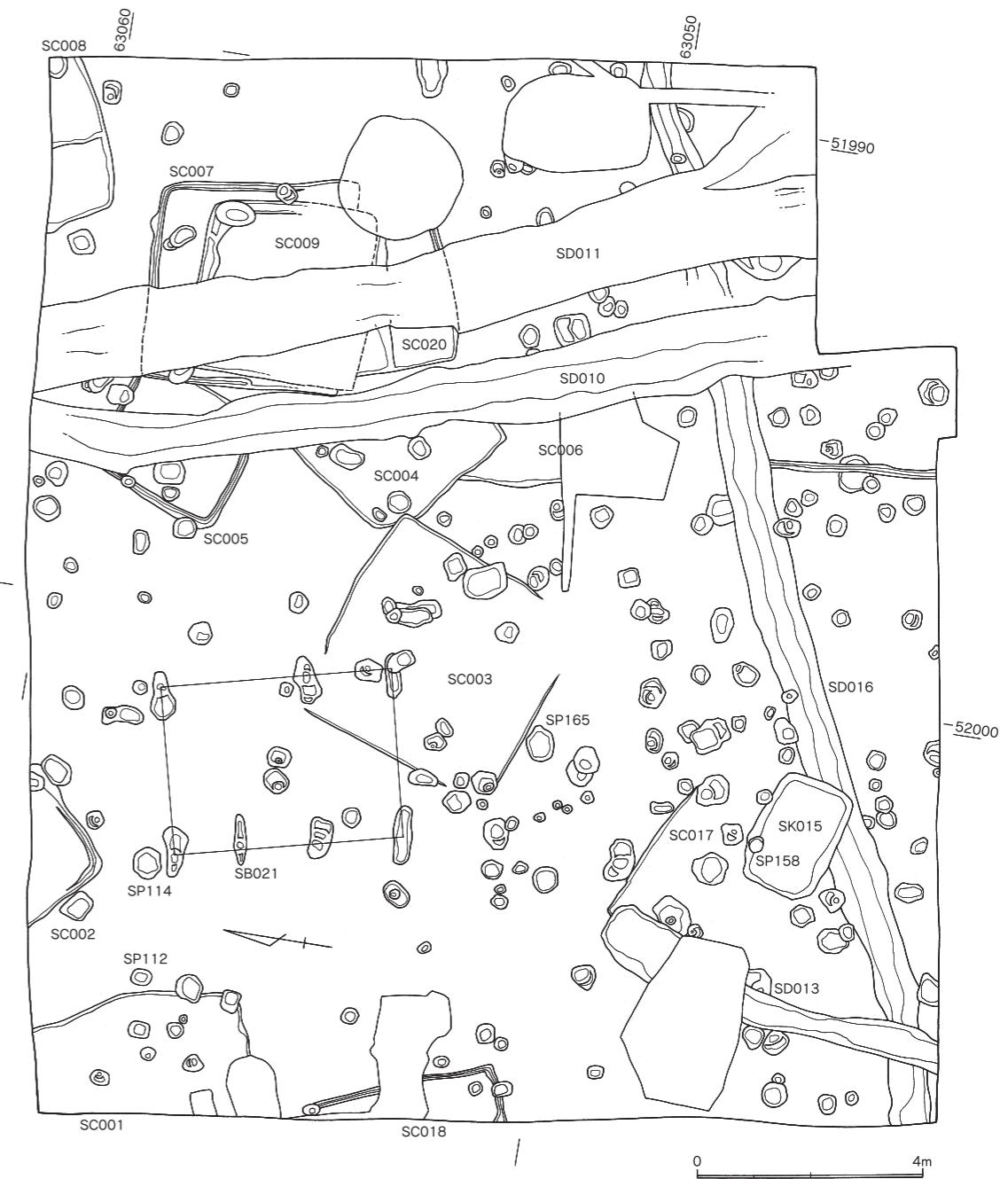


第30図 調査位置 (1/400)

住居内にある、径30cm、深さ40cm程のピットがこの住居の主柱穴に相当するものだろう。柱穴間の距離は1.75mを測る。主柱穴の配置からみれば、SC001は4本柱の竪穴住居であった可能性が高い。出土遺物は、土器の細片がわずかに出土したのみであり、時期は不明である。

SC002（第33図）

調査区の北端、SC001の東側に存在する。調査区内には一部が確認できるのみである。住居の南東辺は長さ2.3mを測り、南西辺は1.8mほど検出できた。全形は不明であるが、SC002は一辺3mに満たない小形の方形住居であろう。住居掘方の深さは10cm程で、遺構の遺存状況は悪い。



第31図 遺構配置 (1/120)

床面は地山の削り出しによるものであり、貼床は確認していない。調査区内では、住居内に主柱穴を確認できなかった。住居埋土からは、少量の土器が出土しており、それをみればこのSC002は弥生時代中期後半に位置づけることができる。

遺物

1は短頸壺の蓋である。外器面は丹塗を施す。口縁端部付近には穿孔が認められる。口径11.6cm、器高2.2cmを測る。2は器台である。口径（復元）10.0cmを測る。

SC003（第34図）

調査区の中央に位置する。住居東隅部がSC004を切っており、SB021とも切り合い関係にある。住居掘方の深さは数cmで、遺構の遺存状況はきわめて悪いが、住居全形を推測できるだけの掘方を確認することができた。それによれば、SC003は南北幅4m、東西幅4.3mを測る平面略方形の住居である。北辺の近くに焼土を検出し、そしてその周囲には白色粘土が散乱しており、この部分にカマドが存在したのだろう。カマドを通る南北軸線と東西対称に存在する4つの柱穴が、この住居の主柱穴である。深さは30～40cm程を測る。カマド側の柱穴間が1.7m、その奥側の柱穴が2.5mと、4つの主柱穴は「ハ」字形に配置されている。

遺存状況が悪いため、遺物はほとんど出土していないが、床面上から須恵器を1点検出することができた。この遺物からSC003は古墳時代後期末葉に位置づけることができる。

遺物

1は須恵器杯蓋の口縁部片である。全体的に調整が粗く、天井部の回転ヘラ削りの範囲も狭い。

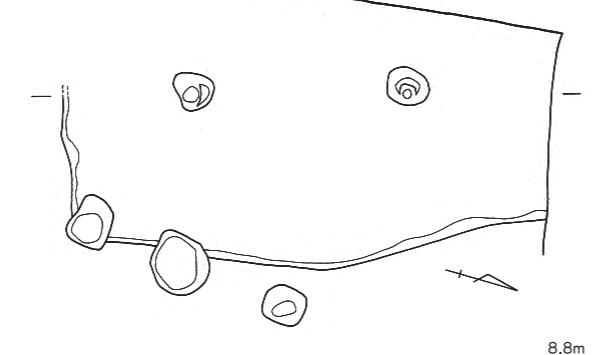
SC004（第35図）

調査区の中央やや東寄りに位置する。住居の中心にはSD010が走っており、住居西側隅部はわずかにSC003に切られている。配置をみれば、SC007・009・020と切り合いを持つのだろうが、その関係については確認できなかった。住居の南西辺は長さ3mを測り、北西辺は3mほど検出できた。全形は不明であるが、SC004は一辺3mほどの方形住居であろう。住居掘方の深さは10cm程度で、遺構の遺存状況は悪い。床面は地山の削り出しによるものであり、貼床は確認していない。

住居内で確認できたピットはいずれも浅く、主柱穴を特定できなかった。住居埋土からは、少量の土器などが出土しているにすぎない。これらの遺物は、弥生時代中期後半に位置づけることができる。

遺物

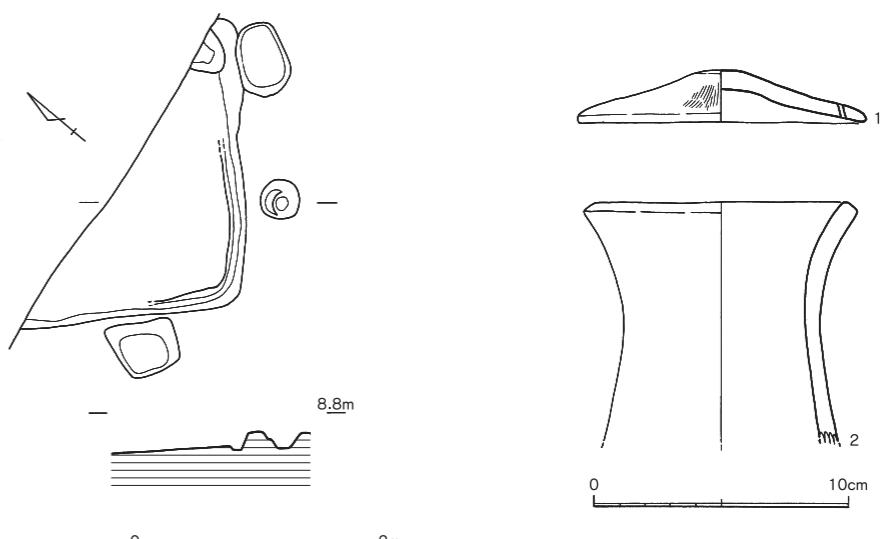
1は甕口縁部片。鋤先状の口縁部を有し、口縁部下には1条の突帯を巡らせる。2は甕等の底部片。平底である。3は柱状片刃石斧。



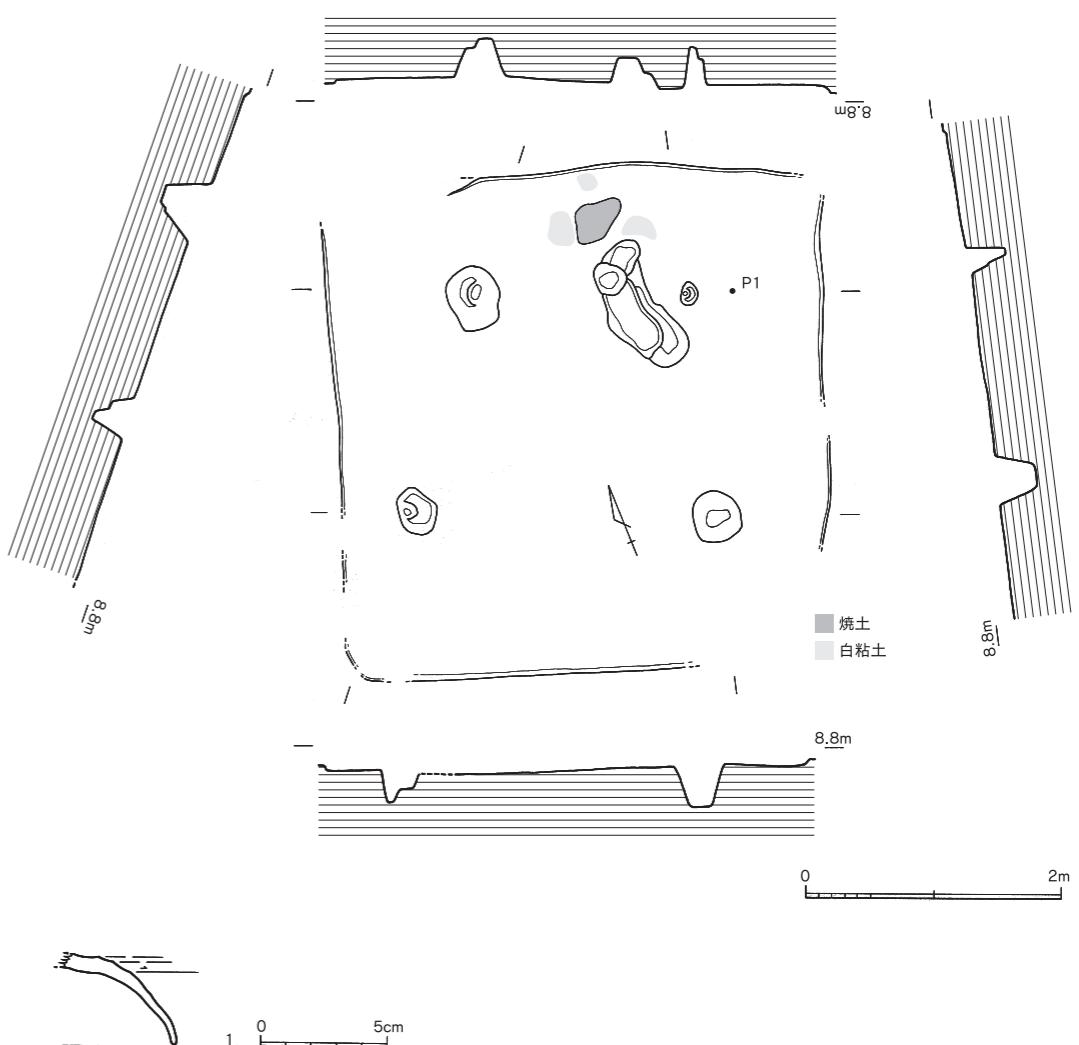
SC005（第36図）

調査区の北寄りに位置する。住居の中心にはSD010が走っており、住居北東側隅部はわずかにSC007に切られている。しかし、住居の

第32図 SC001 (1/60)

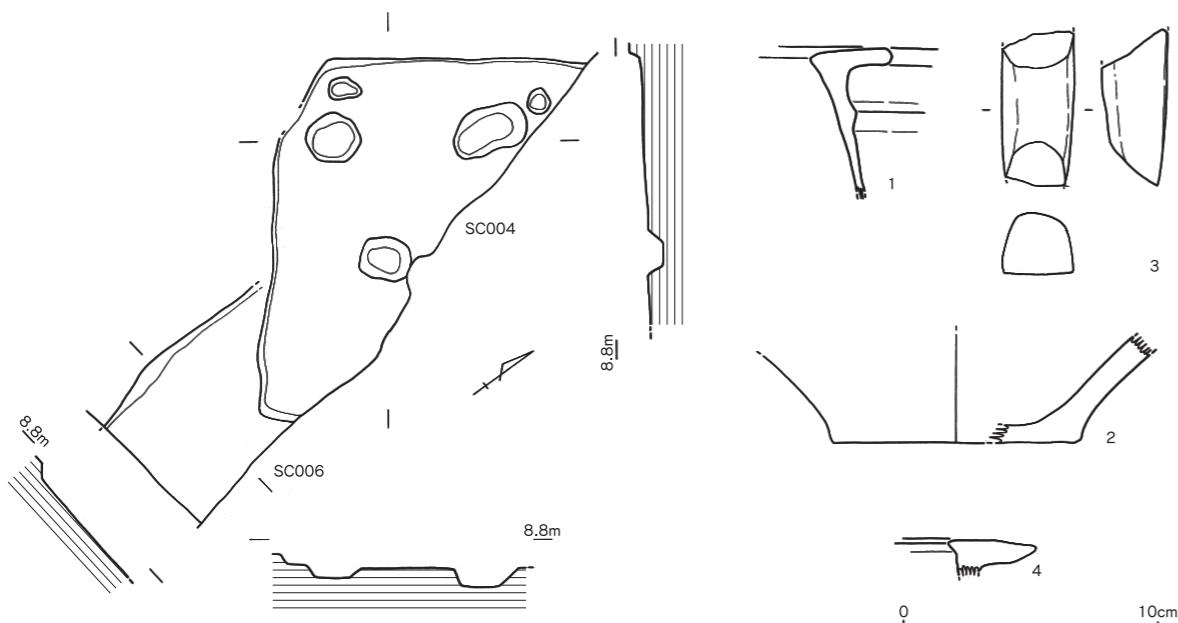


第33図 SC002 (1/60・1/30)

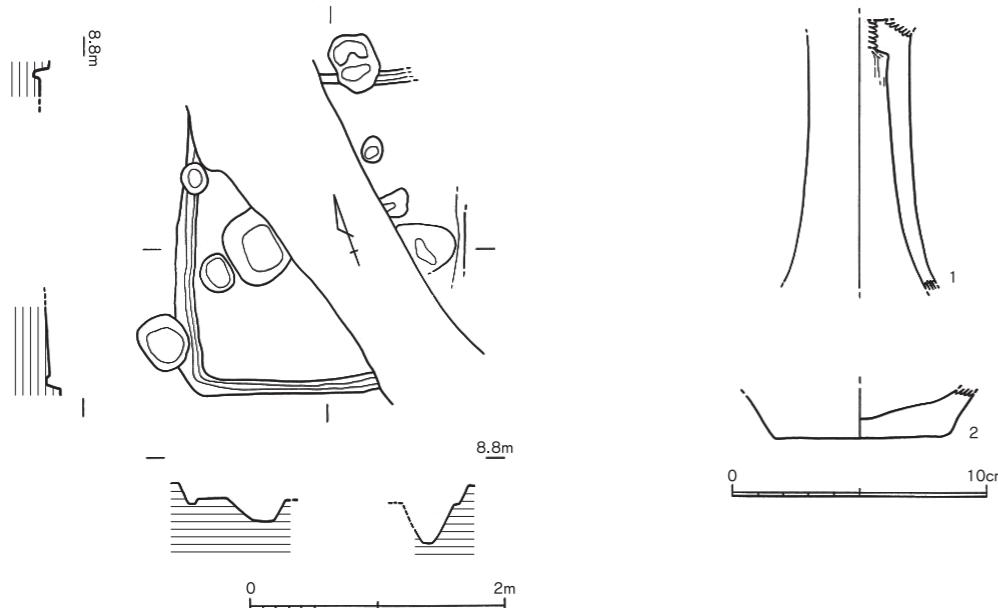


第34図 SC003 (1/60・1/3)

各辺は部分的ではあるが、確認することができ、中でも西辺は長さ2.3m、南辺は長さ2.5mほど検出できた。SC005は南北長2.5m、東西長2.3mを測る略方形の住居である。住居掘方の深さは、十数センチ程で、遺構の遺存状況は悪い。床面は地山の削り出しによるものであり、貼床は確認していない。住居の周囲には壁溝が巡る。住居内には掘方のしっかりした2ピットがあるが、これを主柱穴とするには疑問が残る。住居埋土からは、少量の土器が出土しているのみである。



第35図 SC004・006 (1/60・1/3)



第36図 SC005 (1/60・1/3)

遺物

1は高杯脚部片である。基部径4.0cmを測る。2は甕の底部片である。平底を呈する。

SC006 (第35図)

調査区の中央やや東寄りに位置する。SC004南側にある直線状の段落ち部分を、住居の一部とみなしたもので、西辺を1.7mほど確認できたのみである。住居の北側はSC004に切られ、中心にはSD010が走っている。掘方の深さは10cm程で、遺構の遺存状況は悪い。床面は地山の削り出しによる。SC006は、主柱穴など住居を思わせる痕跡が確認できておらず、住居と断定するには、決め手に欠ける。埋土からは、少量の土器が出土している。

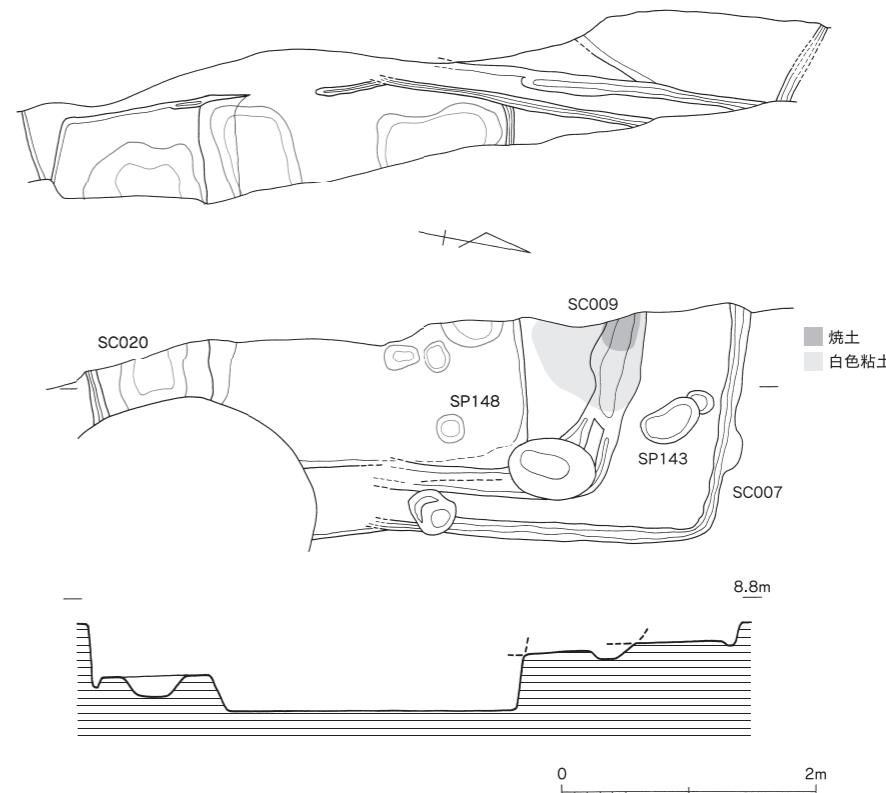
遺物

4は甕口縁部片。鋤先状の口縁部を有する。

SC007・009・020 (第37図)

調査区の北西側に位置する。周辺では、5棟以上の住居が切り合っている上に、住居それぞれの中央部をSD011が走っており、遺構の確認は困難であった。結局、SC007・009・020という3棟の存在を確認したが、解釈できない掘り込み部分もあり、建替もしくは更に多くの住居が存在した可能性もある。

SC007は3棟の内、北側に存在するものである。多くがSC009により失われている。東西幅は3.5m前後、南北幅は不明である。床面は地山の削り出しにより、周囲には壁溝を巡らしている。掘方は深さ20cmほどを測る。床面近くより土器が1点出土した(第38図1)。土師器甕の口縁部片である。SC007は古墳時代前期頃に位置づけることができようか。



第37図 SC007・009・020 (1/60)

SC009は3棟の内、中央部に存在する住居で、時期的に最も新しいものである。東西幅は3m前後、南北幅は不明である。床面は地山の削り出しにより、周囲には壁溝を巡らしている。堀方は深さ30cmほどを測る。住居北辺近くで、焼土を確認し、その周囲には白色粘土が散乱していた。この位置にカマドの存在が推定できる。主柱穴は不明である。

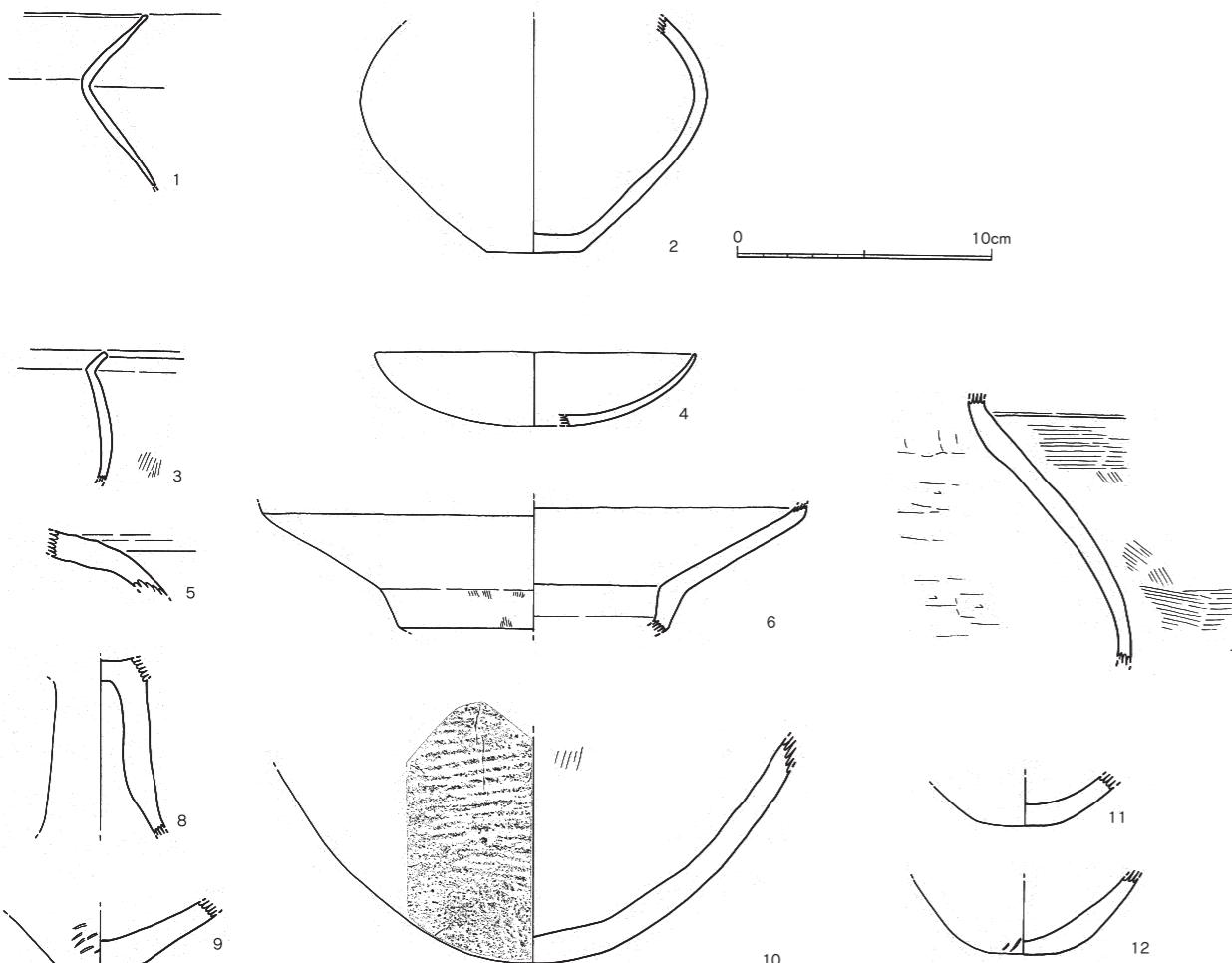
調査時の不手際により、この住居に確実に伴う遺物を抽出することができなかつたのだが、これら住居検出中の資料の中に、少量ではあるが、須恵器が存在している（第38図5など）。いずれも古墳時代後期後半から末葉にかけてのもので、SC009もこの段階の遺構であると考えておきたい。

SC020は3棟の内、南側に存在する住居で、切り合いをみれば、時期的に最も古いものである。堀方は深さ40~70cmを測る。南北3.5m、東西3mの平面長方形プランを有し、南壁に沿ってベッド状遺構を設けている。ベッド部分は地山の削り出しによるものであり、ベッド上面や下段部分などに貼床を行っている。主柱穴は確認できなかつた。SD011により、失われている可能性が高い。

ところで、ベッド上面より土器が1点出土した（第38図2）。壺等の弥生土器であり、弥生時代後期前半に位置づけることができようか。住居に伴うものかは不明である。

遺物（第38図-3~12）

SC007・009・020は、遺構検出中に多くの遺物が出土した。遺物は弥生時代終末～古墳時代前期、古墳時代後期～終末の時期の遺物を主とする。図化可能な資料を図-3~12に示し、それぞれの所見を述べる。



第38図 SC007・009・020出土遺物（1/3）

3は小形甕の口縁部片。4は鉢で、杯部は浅く、口径（復元）12.8cmを測る。5は須恵器杯蓋の天井部片。6は有段の高杯杯部片。7は壺等の胴部片。8は高杯基部片で、基部径3.8cmを測る。9~12は甕等の底部片である。小さな平底（9）、平底気味の丸底（11・12）、丸底（10）がそれぞれ存在する。9・10・12は外器面にタタキ目が残る。

SC008（第39図）

調査区北東隅に存在する。調査区内には一部が確認できるのみであり、全形および規模は不明である。住居西辺が長さ1.2m、南辺が長さ2.8mほど検出できた。住居掘方の深さは10~20cmほどで、遺存状況は悪い。住居西辺に沿って、幅1.3mのベッド状遺構を確認した。ベッド部分は地山の削り出して作られており、ベッド部分には平面長方形の掘り込みを行い、貼床を施している。ベッドの高さは10数センチほどである。調査区内では主柱穴は確認できなかつた。住居の埋土から、少量であるが土器が出土しており、それによれば、SC008は弥生時代終末に位置づけることができる。

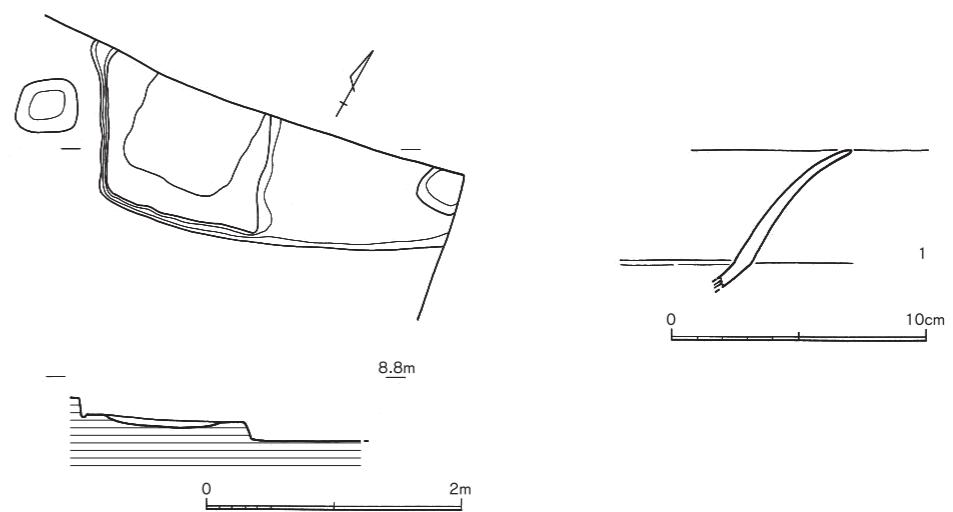
遺物

1は高杯の杯部片である。杯部は途中で屈曲し、口縁部は大きく外反する。

SC017（第40図）

調査区の南西側に位置する。住居西側がSD013、東側がSK015に切られている。住居掘方の深さは数センチで、遺構の遺存状況はきわめて悪く、確認できたのは住居の北辺の長さ2.5m分のみである。北辺の近くに焼土を検出し、その周囲には白色粘土が散乱しており、この部分にカマドが存在したものと考えられる。それによれば、SC003は南北幅4m、東西幅4.3mの略方形住居である。カマドを通る南北軸線と東西対称に存在する4つの柱穴が、この住居の主柱穴である。深さは40~60cm程を測る。SC017は住居の軸線がSC003と平行し、いずれも同じく北辺にカマドを造りつけるなどの共通点が認められる。主柱穴の間隔も2m前後とほぼ等しく、SC017はSC003とほぼ同規模の住居に復元できるだろう。

遺存状況が悪いため、遺物は出土していない。ここではSC003と同じく、古墳時代後期末葉頃に位置づけておきたい。



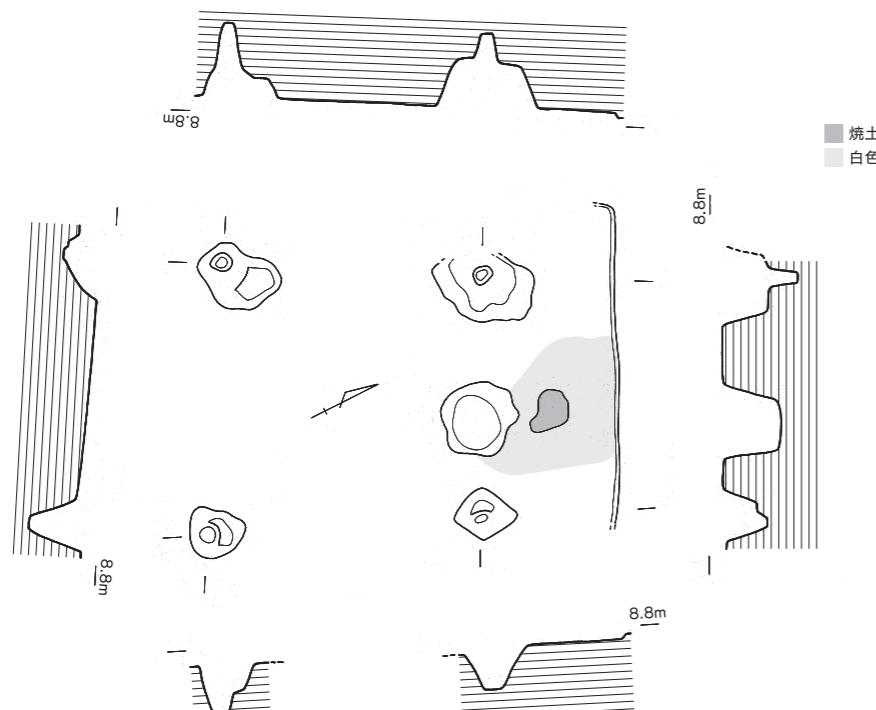
第39図 SC008（1/60・1/3）

SC018 (第41図)

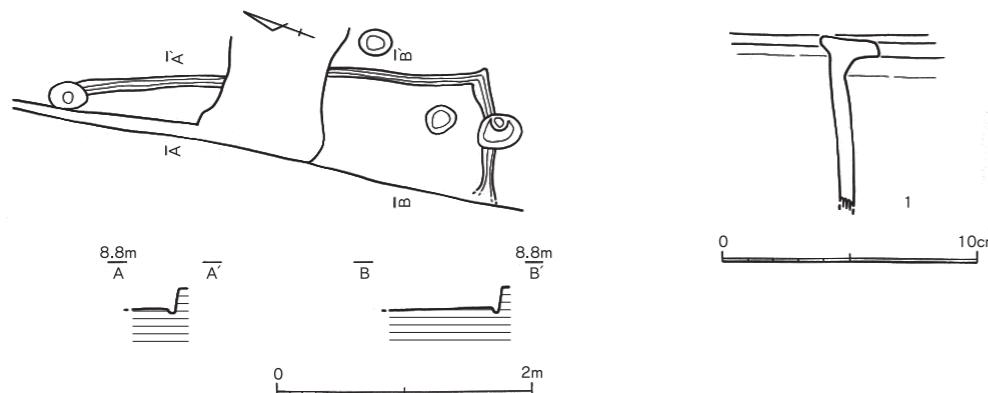
調査区の西端、SC001の南側に存在する。調査区内には一部が確認できるのみである。住居の南東辺は長さ3.4mを測り、南辺は1.1mほど検出できた。全形は不明であるが、SC018は一辺3.5m前後の方形住居であろう。住居掘方の深さは十数センチ程で、遺構の遺存状況は悪い。住居の周囲には壁溝が巡り、床面は地山の削り出しによるもので、貼床は確認していない。調査区内では、住居内に主柱穴を確認できなかった。住居埋土からは、弥生時代中期後半の土器が少量出土している。

遺物

1は甕口縁部片。鋤先状の口縁部を有する。



第40図 SC017 (1/60)

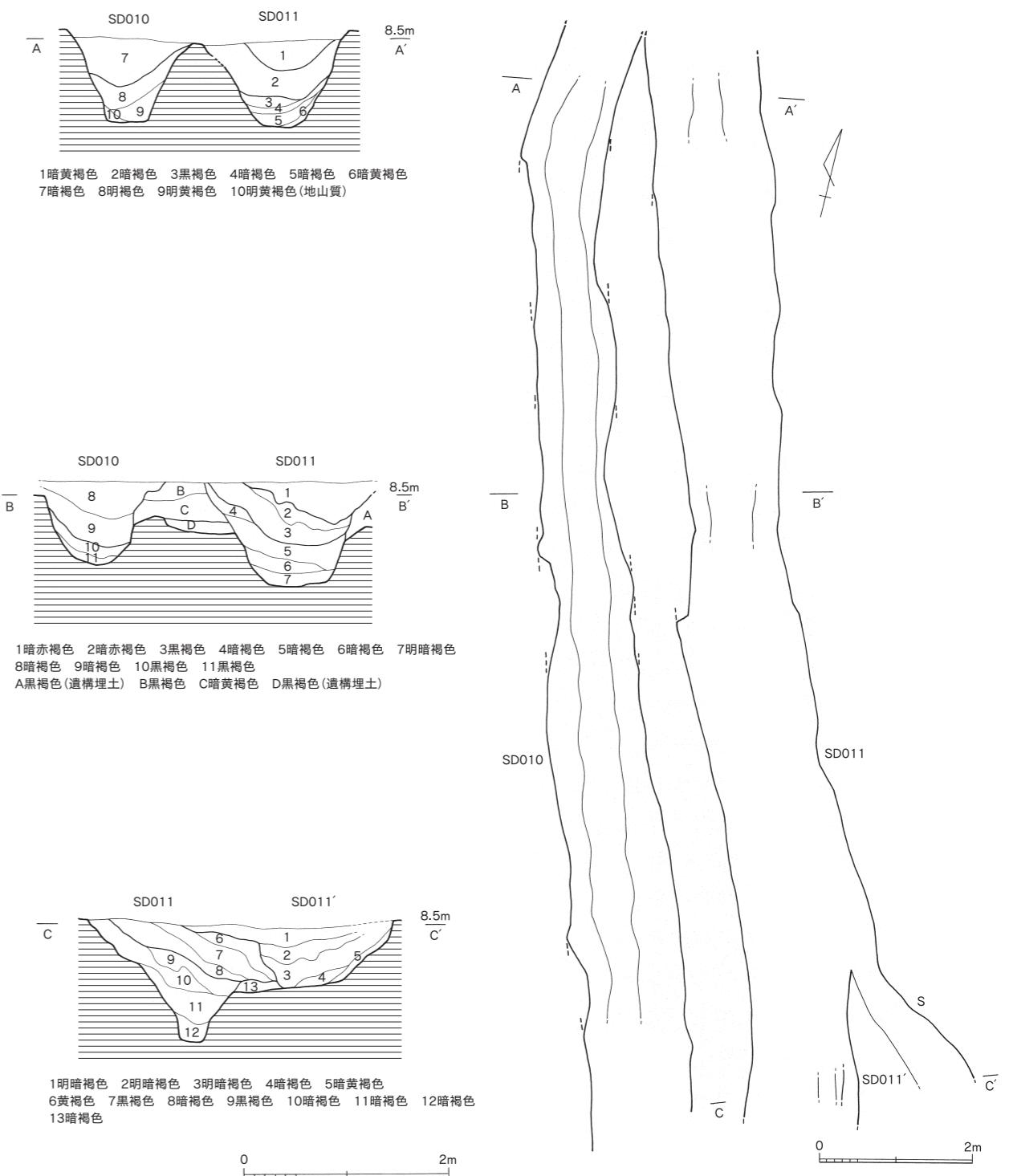


第41図 SC018 (1/60・1/3)

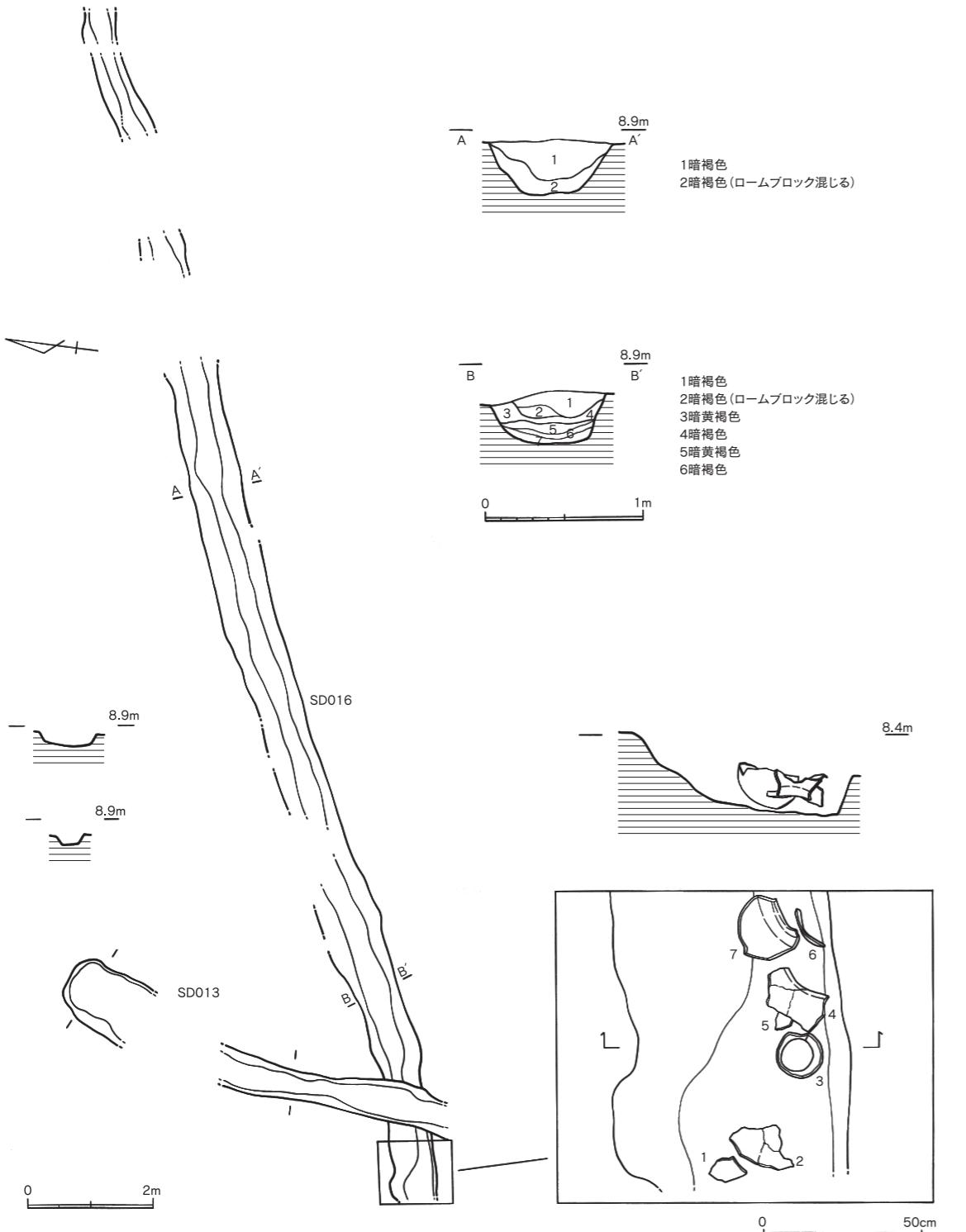
2) 溝 (SD)

SD010・011 (第42図)

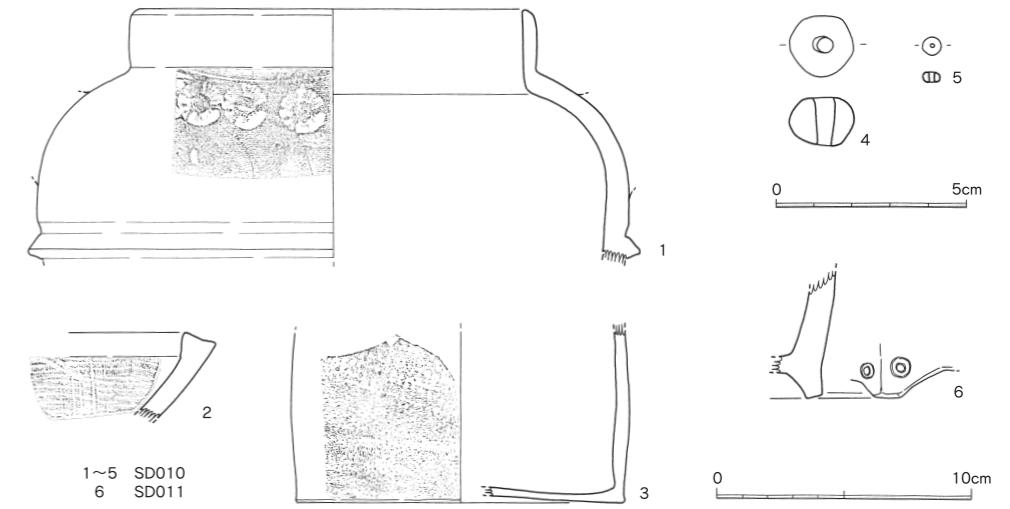
調査区東側を南北方向に走る溝である。西側に位置するものがSD010、東側に位置するものがSD011である。互いに平行しており、調査区内では切り合い関係をみるとできなかった。しかし、SD010は北端で東側へ折れおり、調査区外では切り合っている可能性も高い。



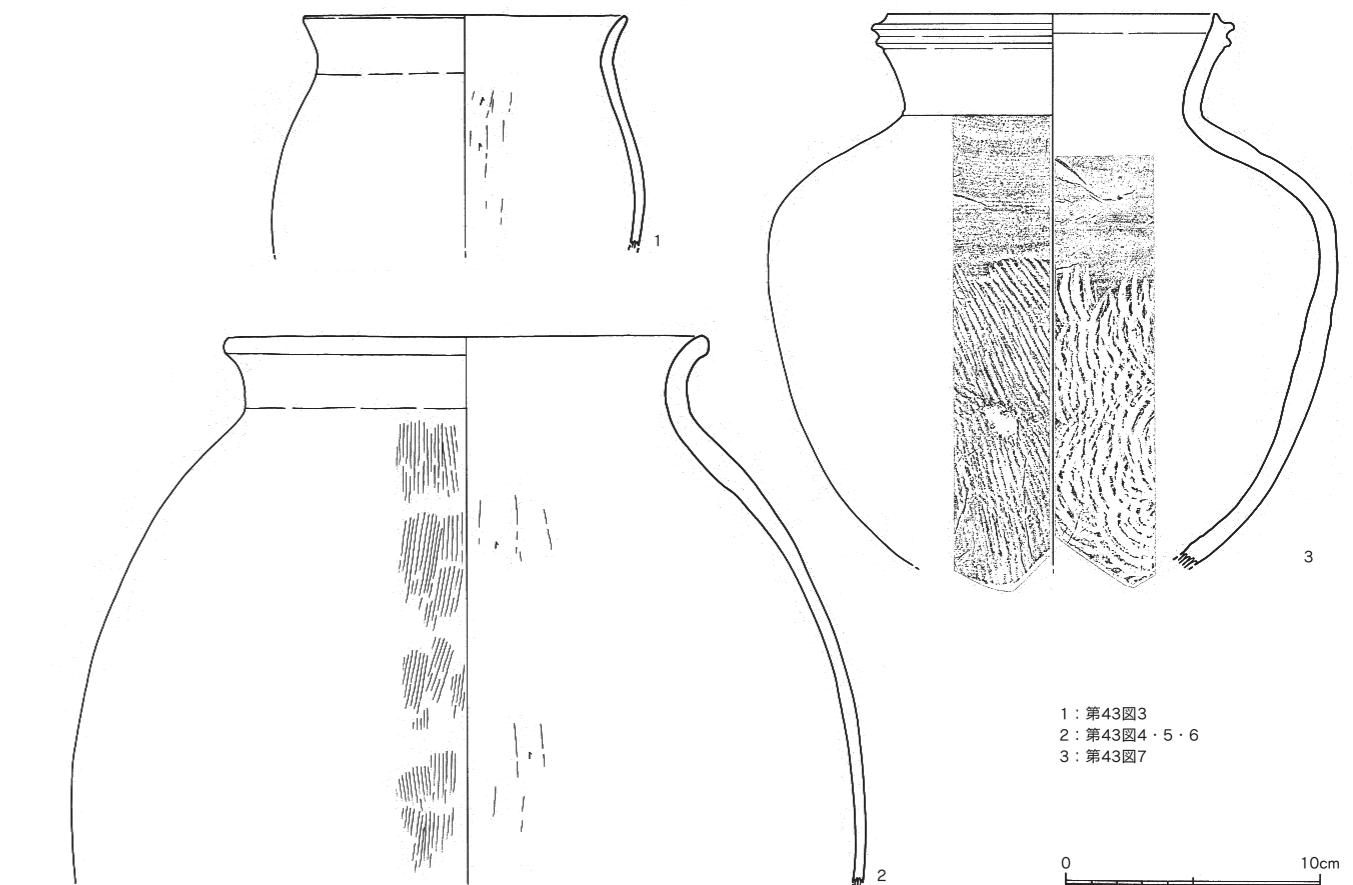
第42図 SD010・011 (1/60・1/80)



第43図 SD013・016 (1/100・1/40・1/20)



第44図 SD010・011出土遺物 (1/3・1/1)



第45図 SD016出土遺物 (1/3)

SD010は幅0.8~1m、深さ0.7~1mを測る。掘り込みは比較的急であり、溝底面の幅は0.3~0.4mほどである。SD011は調査期間の関係で、部分的に溝底面まで掘り下げたのみで、遺構全体を完掘するにはいたらなかった。幅1.5~2m、深さ1mを測る。掘り込みは急で、溝底面は幅0.3~0.6mとややばらつきがある。この溝は少なくとも3度の掘り返しが認められる。3回目の掘り返しが、A-A'断面1層、B-B'断面1層、C-C'断面2~5層であり、2回目の掘り返しがA-A'断面2層、B-B'断面2・3層である。C-C'断面では、6~8層が2回目の掘り返しに該当する可能性がある。3回目の掘り返しにより、SD011は調査区南端において東側へ弧を描くようになっている。各断面をみる限り、3回目の掘削ではやや幅狭くなっているようだ。

SD010・011は堅穴住居6棟を含む多くの遺構を切っており、溝埋土の中は、弥生土器や土師器といった弥生・古墳時代を中心とした遺物が大量に含まれていた。その中で、少量ではあるが、図44に示すように、中世後半期の遺物が含まれており、SD010・011は共に16世紀代に位置づけることができるだろう。

遺物（第44図）

1~5はSD010出土の遺物である。1は釜で、肩部にスタンプ文を配する。2はすり鉢。すり目は粗い。3は高麗陶器の壺か。暗赤褐色を呈し、外器面には部分的に格子目タタキの痕跡が残る。底径（復元）13.0cmを測る。4・5はガラス玉。4は淡緑色、5は青色を呈する。

6はSD011出土の遺物である。6は鉢の脚部片。スタンプ文を有する。

SD013（第43図）

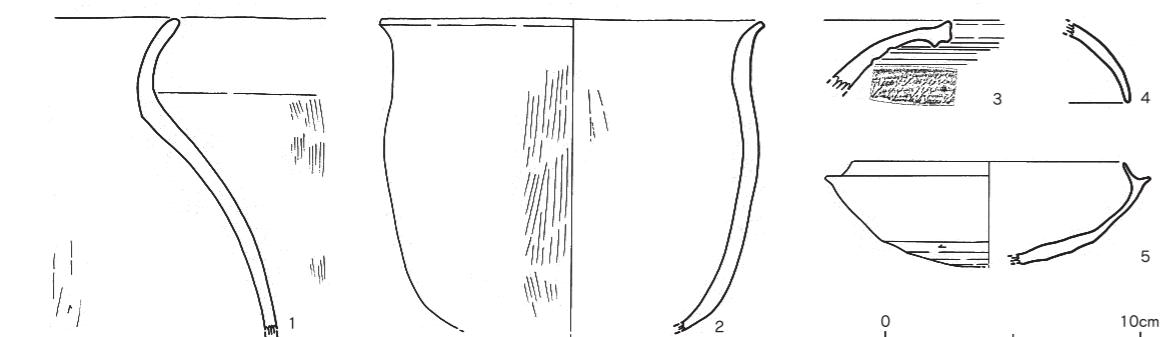
調査区南西側に存在し、南北方向に走る溝で、調査区内では長さ3.2mほどが確認できた。溝の幅は0.3~1.1mで、深さは数cmと遺構の遺存状況は悪い。出土遺物はわずかで、遺構の時期は不明だが、切り合い関係より、SD016より新しいことが判明している。

SD016（第43図）

調査区南側を東西方向に走る溝で、切り合い関係よりSD013やSK015より古く位置づけられる。溝の幅は1m、深さは50cmほどである。調査区内では直線状に伸びている。溝西端では、土器がまとめて出土しており、それによれば、この溝は7世紀代に位置づけることができよう。

遺物（第45図）

1・2は土師器甕である。1は口径（復元）12.4cm、2は口径（復元）18.6cmを測る。3は須恵器甕である。口縁部近くに2条の突帯を巡らしている。胴部下半は外面に荒い平行タタキ、内面に同心円タタキの痕跡が残る。



第46図 SK015出土遺物 (1/3)

3) 土坑 (SK)

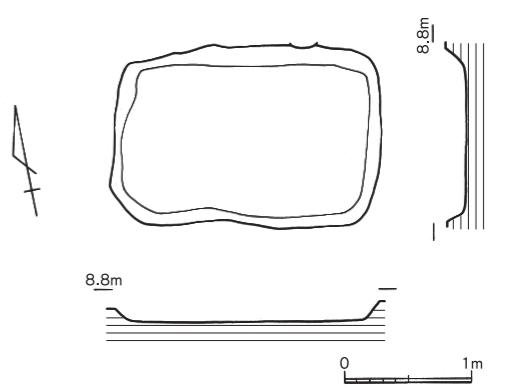
SK015（第47図）

調査区南西側に存在し、SD016を切っている。2.1×1.5mの平面長方形プランを呈し、深さは10~20cm程度と浅い。底面は平坦である。この上面には白色粘土が広がっていた。

SK015からは遺物がまとまって出土している。その遺物をみる限り、切り合い関係にあるSD016と大きな時期差は認められない。

遺物（第46図）

1・2は土師器甕である。2は口径（復元）18.6cmを測る。3は須恵器甕口縁部片である。外面に2条の沈線を巡らし、その下に刺突文を施す。4は須恵器杯蓋、5は須恵器杯身である。

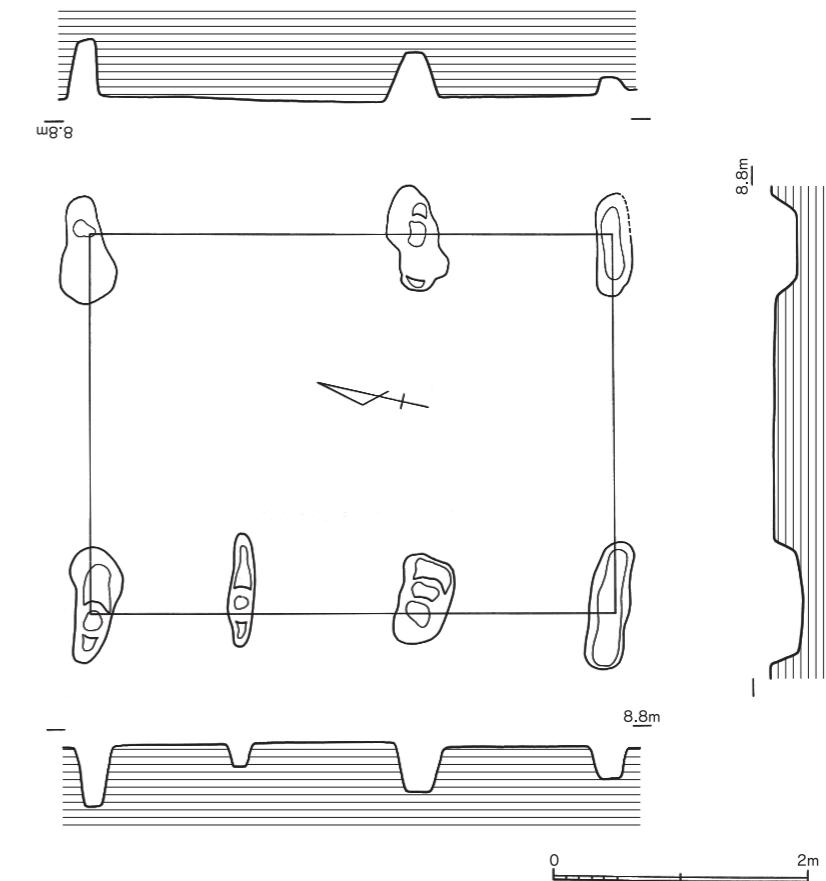


第47図 SK015 (1/60)

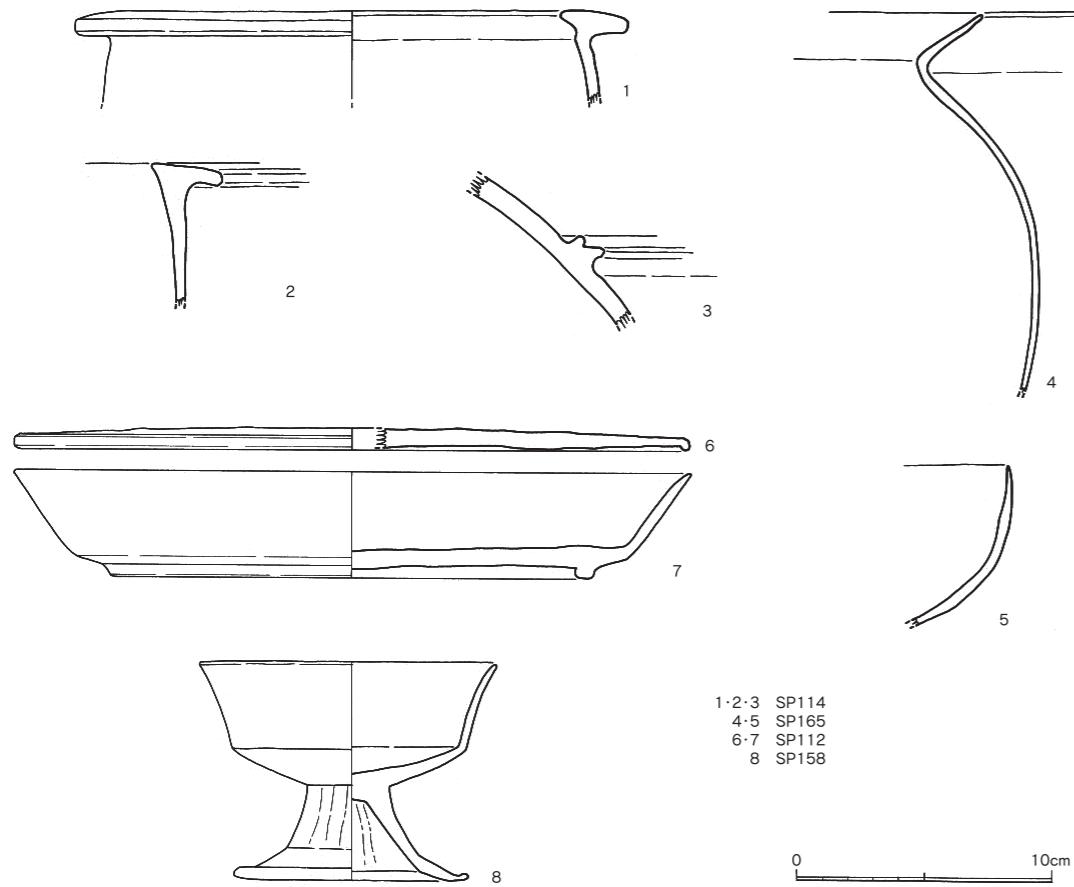
4) 掘立柱建物 (SB)

SB021（第48図）

調査区中央やや北西寄りに存在する梁行1間、桁行3間の建物である。梁行の長さは3m、桁行の長さは4.2mを測る。桁行の柱間は1.2~1.6mである。柱穴はすべて長楕円形を呈し、中央近くに柱を立てる。深さは20cm~50cmとばらつきがある。出土遺物は土器の細片のみで、時期は不明。



第48図 SB021 (1/60)



第49図 SP出土遺物 (1/3)

5) その他の遺物

ここでは、図化のできたピット出土遺物について述べる。1・2は弥生土器の甕口縁部片、3は甕肩部片で、SP114出土。4は土師器甕、5は土師器鉢である。ともにSP165出土。6・7は須恵器蓋杯で、SP112出土。同一の組み合わせのものであろう。8は土師器高杯で、SP158出土。

3.まとめ

以下に調査成果を記し、まとめに代えたい。

遺構の遺存状況は決して良いものではなかったが、今回の調査では弥生時代～古墳時代を中心とした集落の存在を明らかにすることができた。竪穴住居は12軒を確認した。いずれも遺存状況は悪く、その痕跡がわずかに確認できるにすぎないものも存在する。特に弥生時代中期後半の住居は、小形の方形住居の存在しか確認できておらず、更に多くの住居が存在していた可能性も高い。その内訳は以下のようになるだろう。

弥生時代中期後半：SC002・005・018

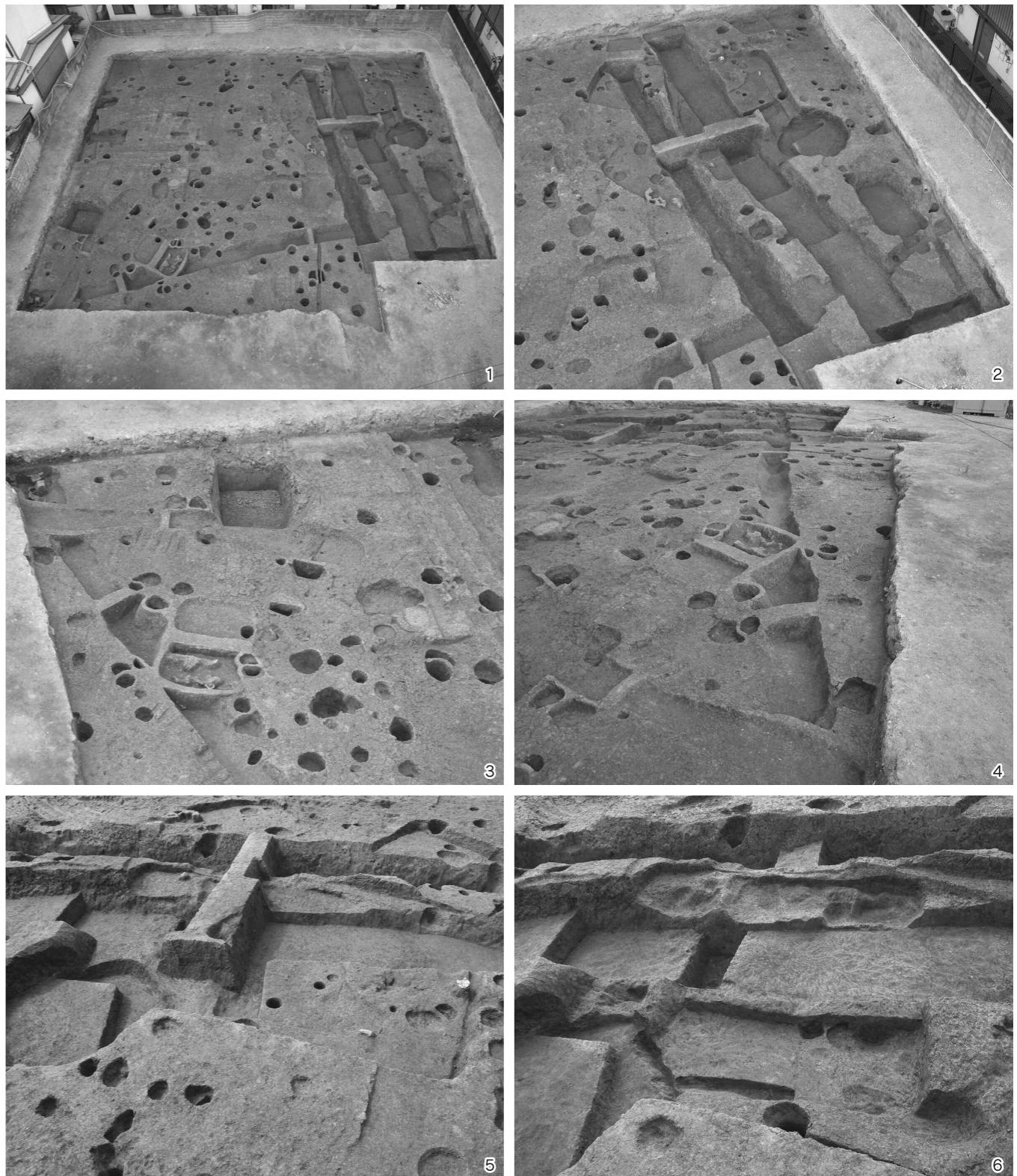
弥生時代終末期：SC008・020

古墳時代前期：SC001・007

古墳時代後期後半以降：SC003・009・017

また、調査区東側を南北に走る2条の大溝SD010・011は中世後半期に位置づけることができる。

全体像については不明な点が多く、周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。



1 全景（南から）

3 SD016・SK015 (東から)

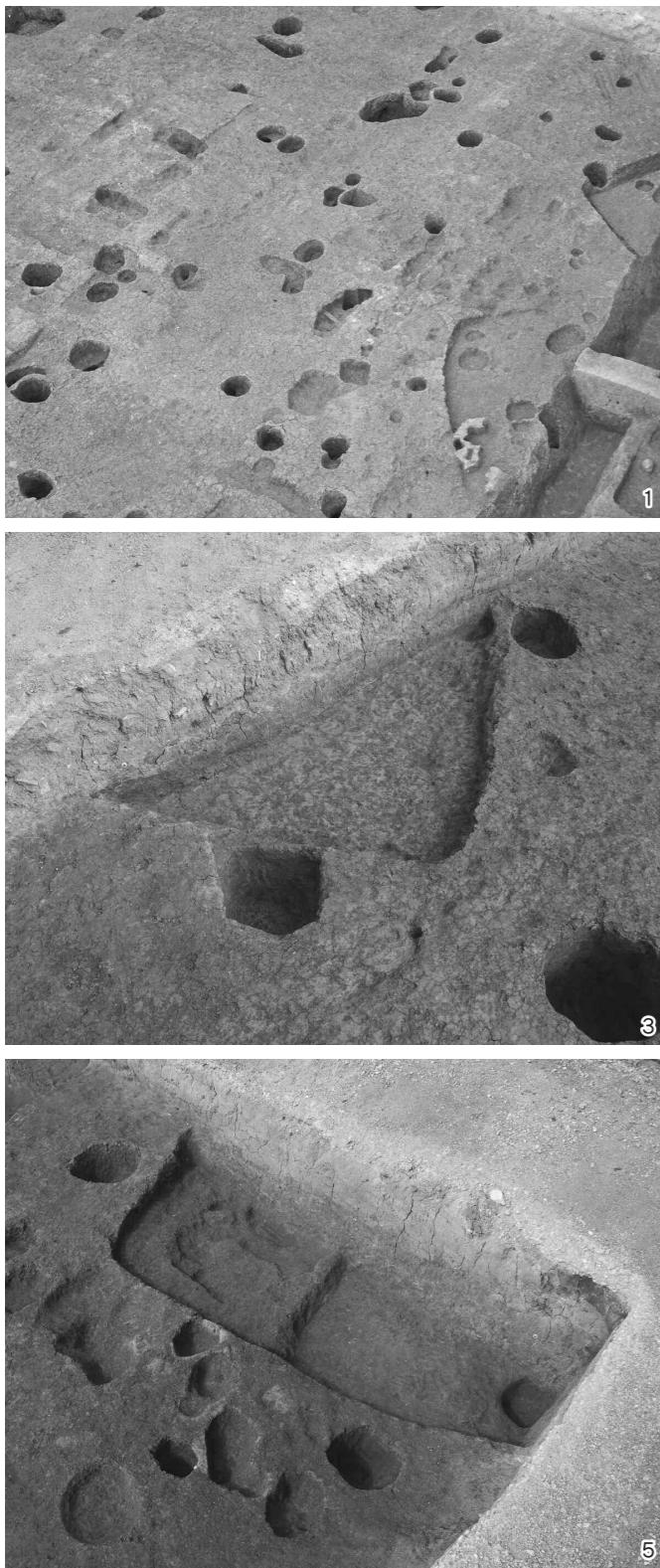
5 SC007・009・020 (東から)

2 SD010・011 (南西から)

4 SD016 (西から)

6 SC007・009・020 (西から)

図版2



1 SC003・SB021（南東から） 2 SC001（南西から）
 3 SC002（南西から） 4 SC005（北から）
 5 SC008（南から） 6 SC018（南から）



報告書抄録

那珂 64

—那珂遺跡群 第88・131・134次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1191集

2013（平成25年）年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10-5